
僕らの未来に正義は無い

智恵理藁侘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの未来に正義は無い

【Nコード】

N5175W

【作者名】

智恵理薫侘

【あらすじ】

高校入学も無事に済んだ彼は入学式を終えて時間を無駄に過ごしている少女とであう。少女は唐突に彼へ言葉を放つ、「このクズが」と。少女と話していくうちに何故か一緒に行動するはめに、そしてこれからの学校生活にて彼女の提案した一つの言葉が彼の未来に波乱を呼ぶ。

巻（前書き）

初めまして、智恵理薫侘と申します。まだ小説の執筆経験は浅いですがよろしく願います。ちなみにこの物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係御座いません。

壺

「このクズが」

「……え？」

生まれてこの方、検査では鼓膜に異常など一度も無く、むしろ僕の身体は風邪もそれほど引かない健康体であって……それはどうでもいいとして、だ。

今聞いた言葉は果たして本当に「このクズが」なのだろうか。もしかしたら聞き間違いかもしれない。何と聞き間違えたのか、このくずが……ああ、そうだ。葛だ、「この葛が」なのかもしれない。ほら、そこらを探してみれば葛の一つどこかに落ちているかもしれないよ。

……んな馬鹿な。

自分で否定して、とりあえず目の前の状況を把握する事にした。艶やかな長い黒髪の少女。

綺麗で雫でも垂らしたらつるりと滑りそうな顔のラインにつぶらな二重瞼に瞳、整った目鼻の配置、ふつくらとした唇。美少女過ぎる彼女に視線を奪われる中、僕は口を開いた。

「も、もう一度言ってくれる？」

「このクズが」

間髪居れずに彼女は口を開いた。

聞き取りやすい声、透き通るような声っていつのかな。

もっと聞きたくなるが残念な点は僕の両目を見つめて、その言葉を放ったのだから「このクズが」という言葉は僕に向けられている事だ。

いやいや、待てよ。まだ解らないぞ？　もしかしたら僕の近くにいる生徒への言葉なのかもしれない。

辺りを見回してみたが、悲しいくらいに人はおらず。

入学早々からどうして僕は美少女にいきなりクズ呼ばわりされな

きやならんだ。これは精神的にかなりきついてもんじゃあない。ちよっとしたトラウマものだ。

今日は絶対寝る前に君の言葉を思い出すだろう。

泣くかもしれない、寝つけないかもしれない、でも恨めないと思う。

——などと考えていると踵を返した彼女は快活な足取りで歩いていく。

僕は「このクズが」の意味を知るために先回りして彼女へ言い寄った。

「あの、さ。どうしてそんな事言うのかな？　僕は君になんかした——痛いっ」

言い終える前に僕の頬に拳が飛んできた。

もう一度確認する、平手打ちじゃなく拳。

女性からの攻撃はいつから平手打ちが廃止になったのやら、頬の痛みが女性でも拳の重みはあるんだよと教えてくれる。痴漢撃退にはこれから拳での攻撃をお勧めしてみるとしよう。

だがこうして考えると、「このクズが」と言われてさらに殴られるとなればよほどの理由があるはず。

「なんていうか……ごめんなさい」

とりあえず謝っておこう。

何をしたのかさえ解らないけれど、何かしたのだから僕はこうして精神と肉体の両方を傷つけられたのだ。全治三日ほどかも、夢の中にさえ出てきそうな、それほど衝撃的だった。

だってそうだろう？

美少女が目の前に現れて、僕の双眸を見つめて「このクズが」、さらにその後殴られるなんてや平凡な日常で先ず体験など出来ない。そりあちよつとマニアックな店にお金を払ってまで罵倒されて鞭で打たれて喜ぶ人達ならば体験してるだろうし、ご褒美なのかもしれないが僕はまったくそういった性癖は無いので誤解はしてもらいたくない。

こう、もつと普通で手を繋ぎあつて街をぶらぶらするような恋愛ならば大歓迎だけど今はそんな事考えている暇は無い。

「私は寛大だ、許そう」

殴りたいほどに、というか殴ってしまうほどに怒っていたのは理解したが、理由が依然空白。

許そうとは言いつつも目つきは未だに睨んでいる。つぶらな瞳では可愛さが打ち勝って心臓の鼓動が跳ね上がる。

可愛いな……。

彼女の名前も知らないし今日が初対面、のはず。

もしもどこかで会ったのだとしたらそれは謝るべきではあるがなかなか思い出せない。中学時代は女性との付き合いは疎いほうだったし何より人付き合いが苦手なほうだ、思い返しても彼女との接点など見当たらない。

ああ、そういえば入学式で新入生代表として挨拶をしていたっけ。あのような行事は眠気を誘う謎の雰囲気が僕の意識を駄目にしてしまふから彼女の名前や話の内容は頭の中を素通りしてしまったので憶えていないけど、壇上に上がった時に周りの男子生徒達がやけにそわそわしていたっけな。

噂のなんとかや生徒会候補とかでその場の無駄話は全て彼女の会話に染まった。

「いいや、やっぱり一度殴っておこう」

言下に、僕の意識は途絶えた。

最後に見たのは何だっただろう、ああ——彼女が僕の顔に拳を勢いよく振るった姿だったかな。

巻（後書き）

更新は出来るだけ早くしていけるよう目指して頑張ります。

式（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
御座いません。

式

春の清々しさと新しい環境に対する緊張を引きずりつつ、入学式は眠気に勝てず気がついたら終わっていたその日。

これから長い付き合いになるクラスメイトとは現在会話の一つも出来ていない状態。なんていうか人付き合いは苦手なのだ。同じ中学の生徒もいないのでどう接していけばいいのか解らない。

それにクラスメイトの大半は既に教室から出て行ってしまったしね。教室に残っているのは僕のように孤立してしまった生徒ばかり。初日から出遅れた感じがまだまだこれからだ、気にする事は無いさと自分に言い聞かせた。

しかし我ながらすごいところに入学したな、と教室の一番後ろ窓側にて窓の外に広がる空を見て小さく溜息を漏らした。

南奥平輪学園高等学校、略して南学は生徒数が千人を超えるこのご時世には珍しい所謂マンモス校。

一年だけでクラスは十一にまで及ぶほどであり、廊下には人、人、兎に角その言葉しか思いつかないくらいに人がいる。

今日は授業も無く、後は部活動見学か校内を自由に見て回るか帰宅かの三択で廊下の生徒達は歩きながら三択を選択中ってわけだ。

僕はあまりの人の多さに三択を保留して机で現在様子見中。

机に置いてある紙を読むと、校内見学では食堂も開放しており、実際に食事するのも可能との事なので食堂にでも行ってみようかな。南学の食堂は広い・美味い・安いらしいので味わっておかねばなるまい。

そういうわけで僕は人が引けてきた頃合いを見計らって食堂へ。食堂、というよりも大食堂？ それくらいに広く何百といるだろう生徒達を軽々と受け入れて、まだまだ空席があるぜと言わんばかりの食堂に空いた口が塞がらない僕は食券自販機を求めて人の波を掻き分けていった。

ようやくたどり着いた食券自販機コーナーという看板の下には食券自販機が一、二、三……十台。

これなら生徒も昼時に渋滞を引き起こしはしないね、少々置き過ぎやしないかとも思うけど。

メニューは和食から洋食まで取り揃えており安いものは三百円で、高いものは六百円と財布にとても良心的だ。

ただ、高級欄と括られたメニューにはフランス料理であろう料理名で安いものは三千円から、高いものは一万円というセレブ専用があり、僕は卒業までに一度でも購入できるのだろうかと財布の中身に問いかけたが、それは無いねと小銭達が答えた。

何人かはそのセレブ専用のメニューを選んでボタンを押していたが偉大なる諭吉を千円札と勘違いしてやしないかというくらいに自販機へ飲み込ませていた、ああ……僕がそれをお財布へ飲み込ませてあげたい。

そんな僕はというとカツ丼を選んで購入、今日の昼飯三百円なり。出来上がったカツ丼をトレーに乗せて鼻へとちよつと近づけて香りを楽しみつつ席選びをするものの、一人での昼食は予想以上に寂しくて、周りの和気藹々としている雰囲気を押されて僕は一番端の席へ着席。

そんな寂しさも、カツ丼を一口食べたなら吹っ飛んだのでよしとする。

柔らかい牛肉に甘みのあるたまねぎと絡む卵の味、口の中でそれらが混ざり合うともはや絶品としか言いようが無くほつぺたが落ちこちるってもんだ！ これからの学校生活での昼食メニューのレギュラーメンバーとして早くも確定、おめでとうカツ丼君。

他のメニューは定番のものから選んでいってレギュラーメンバーを構成していくとしよう、カレーや炒飯、ラーメンなどまだまだ選びたいものはいっぱいいる。

ほっと一息ついたのは午後一時あたり。

生徒達は減る様子が無く、まだまだ校内を見て回ったり部活動を

見学したりと右往左往状態。

とりあえず食堂から出たはいいものの僕は別に部活動はするつもりなんて無いし校内を見て回るにも、あまりに広すぎて迷ってしまいそうで不安だ。

中庭を通つてみると、奥の方で何かが動いていた。

「す、すみませんでした……」

「ならば私の足でもお舐めなさい、この下僕が」

妙な台詞が聞こえてきて、僕は好奇心に撥られて顔を覗かせてみる。

そこには扇子を持った少女と、土下座をしている少女がいて、その光景には些か理解するには時間が必要で、数秒間ほど僕は硬直していた。

土下座をしていた少女は靴下を脱いだ少女の足を涙を流しながら綺麗に舐め、まるで悪魔のような表情でその少女を見つめる、印象的にいわば悪女。

「む……？」

心の中で悪女だなあとか囁いたところで、その少女はこちらに気づいて顔を向けた。

「あ……」

存在を確認して暫しの静止。

中庭は木々が多く茂っていて彼女の顔は木の枝やらでなかなか見づらいが、僕に視線を向けているような気がする。

「いや、その、お邪魔しました」

僕はすぐさまにその場を離れた。

この学校じゃああのような光景は普通なのかもしれない、まだまだ世の中広いからね、僕の知らない事は多いだろう。

うん、気にしちゃ駄目だ。

今は校内を回ってこの学校を知り尽くそう、さっきの事は忘れてさ。

そうだ、屋上にも行つてみるとするか、丁度階段があるし上が

って降りるだけの単純な道のりならば迷う要素は皆無だ。

そうして屋上を目指したのはいいものの、三階あたりで疲れてきたがあと一階の辛抱だと思って何とか到着。身体が随分と鈍ってき
てるな、最近は全然運動してなかったからね……。

屋上は生徒はそれほど多くなく僕を含めて三人程度つてとこ。

まあ……ベンチがいくつかあるだけで特に面白みなど屋上にある
はずも無く求める必要も無いので仕方が無い。

フェンス越しから町を見渡せるくらいで風景は格別ではあるが、
それよりも今日は部活動見学などに時間を割いたほうがよほど利口
だろうね。

用はここにいる生徒は暇人って事だ、悲しいけれどこれが現実な
のよね。

僕はベンチに座って暫し空を仰いだ。

雲ひとつ無い青空は見てみて心が清々しくなる。今日は五時まで
校内にいていいらしいので時間はいくらでもある、ここにしばらく
いよう。

町を一瞥すると高層ビルがいくつが目立つ、いつ以来だろう、こ
んな景色を眺めるのは。

森が多かった場所は今や高級マンションがいくつか建てられてる
ようだし、田舎という言葉はこの町では死語になってしまったよう
に感じる。住んでいて気がつかなかったが、町は確かに変わってい
るのだ。

それにしても四月の風は当たり前続けると肌がひんやりとしてきて
耐え難い。屋上という事もあって風が強いのもある。

僕は腰を上げて屋上を出る事にした、しばらくいようと思ってい
たけど今日はもう帰ろうかな。

出口を目指して歩いていった僕は、出口をくぐらずに足を止めた。
別にもう屋上には用など無い、ただ出口の方に少女が一人立って
いたのだ。それも飛びきりの美少女、この学校は生徒数から考える
とアイドルが通っていてもおかしくは無いが残念ながら彼女をテレ

ビで見た事は無い。

これからスカウトされてテレビに出る可能性は十分にあると思うがね。風に靡く長い黒髪がシャンプーの宣伝にどうですかと持ち掛けたい。

そんな想像はいいとして、だ。

腕を組んで仁王立ちするその少女は僕を見ているような気がする、いや——見ているのではなく、睨んでいるという表現に変えたほうが正しいかもしれない。

僕が右へ移動すれば彼女の黒目も右へ、僕が左へ移動すれば彼女の黒目も左へ。

ここで反復横飛びを試みたら彼女の黒目はどうなるのだろう、なんてくだらない事を考えるのは止めておいて、だ。

僕が屋上にいるのが彼女を睨ませている原因なのかもしれないしここは触らぬ神に祟りなしという事でそくさと出て行くとしよう。そうして僕は歩数を重ねて彼女の横を通ろうとしたものの、横移動されて道を阻まれた。

「あ、あの……？」

どいてもらってもいいですか？ そう言おうとしたが彼女の顔を見て、引き込まれる魅力に心臓の鼓動が高鳴り、言葉は喉から放たれずに何処かへ雲散されていった。

でもこの状況……何なんだ？

名前も知らない少女に睨まれて、道を阻まれているが僕と彼女はクラスメイトでも無く接点など一切無い。

どうしても接点を挙げるとするならば屋上にいる、それだけだ。すると彼女は大きく溜息をつき、一度目を閉じて眉間にしわを寄せて数秒間その表情を固定させる。

そして目を開けてゆつくりと彼女は口を開いた。

「このクズが」

参（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
御座いません。

目が覚めるとそこには青い空と黒い影が一つ飛び込んできた。

太陽はまだまだ元気だと主張して僕の双眸を刺激したためすぐに目を閉じたが、やってきた漆黒の中でどうして青い空と黒い影があったのかを考える。

それに後頭部には柔らかい感触、枕にしてはちょっと小さいが心地は良いが背中あたりは固い感触。手でさつと触れてみると木材の感触がベンチで仰向けになっっているのを理解した僕は、どうして仰向けになっっているのかを考えると同時に今日の入学式から少女に殴られるまでの記憶が走馬灯のように浮かび上がった。

「そうだ、女の子に殴られたんだっけ……」
待てよ……。

よくよく考えてみて、だ。入学式当日に知らない女の子と屋上で会って「このクズが」と言われて殴られるなんて妙な話だ。

そして今はベンチで仰向けになっっているって事は、僕はベンチでうとうとしてそこらへんの柔らかいものでも見つけて枕代わりにして眠ってただけなんじゃないかな。

「夢……だったのか」

そうに違いない。

「いいえ、違うわこのクズが」

違うとさ、わざわざ罵倒までして教えてくれるなんて刺激的な人だ。

黒い影は僕を殴った張本人の頭で間違い無く、頬には彼女の長い黒髪であると思われるさざりとした感触がくすぐったかった。

目を開けるのが少し怖い。

また睨まれてるんじゃないかって思ってたさ。

それでも目を開けなければならぬわけで、いざ現実を見てみるとそこには予想通りの表情をした少女が顔を覗かせていた。

「三十分ほど寝てたわよ」

三十分ね……寝てたんじゃなくて気絶してたの間違いだろ？ 主に君のせいで。

「ほら、起きなさい。膝枕も疲れるんだけど」

完全に状況を把握して、慌てて僕は上体を起こした。

膝枕なんて、僕がいつか叶えたい夢の一つで思いがけないところで実現したが何だか複雑な気分。だってそうだろう？ 僕を「このクズが」と呼んだ奴の膝枕だよ？ 僕を殴った奴の膝枕だよ？ 嬉しいけど、複雑だよ。

僕は姿勢を正して彼女と距離を取った。

それでもって問う。

「あの……僕、どうして君に殴られたんだっけ」

「貴方、見たでしょ」

「見たって何を？」

目覚めたばかりだと思いが上手く回らない。

「中庭」

「え？ あ、ああ、あれか」

そうそう、中庭に少女が二人いて、一人は悪女といたいぐらいに恐ろしい事をしていたね。相手を土下座させて自分の足を舐めさせる、もはや相手の心を完全に折る行為だ。

「あんなのは控えたほうがいいと思うよ」

ということで僕はここで、と席を立つたが彼女は僕の腕を掴んで離さない。

「私ね、優等生としてここで過ごしていきたいの」

彼女の顔をよく見てみると、徐々に記憶が蘇ってくる。

入学式の時だ、壇上に上がって一年生代表として挨拶をしていた彼女の姿を。

名前は……小鳥遊なんとか、夢うつつでよく憶えてないけど。

「そうなんだ、だったら尚更だよ」

では僕はここで、と帰宅の第一歩目を踏み込んだが彼女は僕

の足を思いつきり踏んでくる。

「痛いっ！　ちょ、ちよっと……」

「変な噂を流されたら本当に困るの。それにね、あいつは中学の頃のクラスメイトですごくウザかったから懲らしめただけなのよ？」

懲らしめるという言葉を彼女はきちんと理解しているだろうか。

あれは懲らしめるなんて生ぬるい行為だったと僕は思う。

「ここで貴方を何とかしておかないといけないって私は思ったのよね」

「大丈夫、僕は口が硬い」

「でもね、私はちよつとこの学校でやりたい事があるのよ、そのためには人手が必要なの」

「そっかい、頑張つてね」

なんだかこの場をやり過ぎしたい一心で対応が適當になってきている。

「貴方を暴力とか脅しとかで押さえ込むよりも、甘い蜜を吸わせて丸め込んだほうがいいかなって思ってたね」

怖い事をさらりと言う奴だ。

悪魔のような笑顔を見せる彼女、思わず心の中で悪女再来と呟いた。

「従いなさい、そうすれば楽しい学校生活が待ってるわよ」

従うといつても、嫌な予感しかない。

ここはどう対応するのが適切だろうか。

従うふりをしてこの場をやり過ぎして後はなるべく避けるとかそういうのがいいかな。

僕は腕を掴まれていて足も踏まれてる、けれど女性の力なんてそれほど強大じゃない、強引に振りほどいて逃げるという手もあるが、彼女の顔を見ると気が引ける。

その可愛い表情が上目遣いで僕を見ている。

撫でたくなる、触りたくなる、それでも今は駄目だ。

ならば従ったふりが一番かな。

「はい……解りました」

一応下手に出て言葉には重みをつけておいた。

「よろしい。私の事は彪光と呼びなさい、愛を込めてね」

内ポケットから彼女は扇子を取り出して僕の顎をそれで持ち上げた。

「彪……光……」

女性らしくない名前、渋いね。

「うん、いいわね」

「それにしても、可愛いのに何だか残念だ」

はっとして、口を自分で塞いだ。

思わず本音が出てしまった。

「い、い、いきなり何を言うの！」

彼女は肩に軽く拳で殴ってくるが痛くは無かった。

効果音をつけるならばぽかぽかとかそういう音。

見る見るうちに顔が真っ赤になって視線を落としてしまった彪光を見て僕は笑みを溢してしまう。

頭を撫でなくなるくらいに無垢、抱きしめなくなるくらいに綺麗、触れなくなるくらいに可憐。

扇子で顔の下半分を隠しつつ、彼女は腰を上げて歩き出す。

「ふう、も、もうここには用など無いわ、帰りましょう。そうね、お互い親睦を深めるためにどこかでお茶でもしましょうよ」

親睦を深める……ね。

まあ大人しく彼女についていくとしよう。

帰るといつても帰り道は同じかななどお互い確認はしていないが、一緒に歩くという行動がちよっとした優越感を得られた。

彪光は未だに扇子で顔半分を隠しつつもちろりと僕の顔を見た。

口元は扇子によって窺えないが笑みでにんまりとした口になっているんじゃないかと想像。

校門から出た辺りで彪光は扇子を閉じて顎に添えるようにつけては小さく溜息。

彼女の視線を追って見てみると黒光りした車両、見た目からしてベントツとしか言いようが無い高級感を放つ乗り物が近くに停まっていた。

そのベントツには黒服が一人立っており、こちらへ向かって歩いてくるが彪光は来るなど言いたげに扇子を振って合図すると黒服はその場で停止。

なんだろうあの人は、そんな考えを持ち合わせるのも蛇足にすら思ってしまう外見は見るからに、護衛とかそういう印象。

サングラス越しでどうやら僕を見ているようだけど大丈夫かな、殴られないかな、殺されないかな、大袈裟かな。

「大丈夫よ、貴方は男にも惚れられそうな顔してるけど彼は違うから心配しないで」

僕の思考は口から自然と出ていたのか、彼女は僕の肩を軽く扇子で叩いた。

心配してくれる部分がちよつとずれてるな、とは思うがね。

「普段はあれが普通なの？」

“あれ”というのはもちろん、ベントツで帰宅に護衛付きの事である。

「そうよ、中学からずっとね。もちろん今日は貴方と一緒に帰るわ」それはちよつと嬉しいね。可愛い子と一緒に歩けるなんてさ、まあ中身は見なかった事にして、だ。

先ほどの護衛さんがずっと遠くではあるがついてきているのが気になって仕方が無い。

「もしかしてお嬢……様？」

家にはメイドや護衛達がいる、毎朝車で登校、お嬢様なんて呼ばれてたりして、なんて想像をしてみる。

「貴方が今思い浮かべた想像に近いと思うわ、でも気にしないで」頭の中を探られたような気分だ。

町に入っすぐのところに喫茶店があったので、店の良し悪しなど関係なく僕達は喫茶店へ入った。

テーブル席に座って彼女を目の前にと何だか緊張してきて、僕はコーヒーを口に運んで落ち着こうとしてみるが、なかなかうまくいかないもんだね。暖かいものってのは落ち着くと聞いたが緊張が増すばかりだ。

「意外と美味しいわねここのコーヒーは」

扇子を華麗に開いて彪光は軽く扇子で扇ぐ。

それは熱いや暑いとかではなくて、コーヒーの香りは鼻腔へと誘い込んでいるようだ。本格的に味の楽しみ方は学んでいる様子。

僕なんかはコーヒーを飲んで苦いけど美味しい！ 略してにが美味しい！ なんつって！ とか阿呆な思考でいつもコーヒー飲んでたけどね。

それも時々ブラックコーヒー、いつもは砂糖入りのあま〜いコーヒー。

「貴方はあま〜いコーヒーでも飲んでそうだけど」

「ごもつとも」

「でしょうね、貴方の性格を幼少期から予測するに当たって、成長後は角砂糖一個をコーヒーに入れたら意外と美味しくて今では角砂糖を増やしてあま〜いコーヒーを飲んでる姿が思い浮かんだわ」

彪光はひよつとしたら僕の全てを把握する能力を持っているんじゃないかな。それとも監視カメラでもつけて僕を見張っていたとかさ。

そう思いたくなるくらい正確すぎる。

「それはいいとして、ね。どう？ あの学校の印象は」

「んー、すごいなあって感じ？」

食堂が広くて料理は安くて美味しい、校舎が大きくて綺麗、教室グラウンドが広い、他校とは圧倒的に一つ一つが違うので感想としてはすごいなあというのが代表で出たがこのすごいなあはこれらの要素が含まれているというわけだ。

「そう……私はすごく退屈って思ったわ」

彼女は扇子を閉じて、僕の顎につきつけた。

テーブルの幅が広いおかげで彼女は無理をして手を伸ばして僕の顎に扇子をつけるその仕草はなんていうか、一言で表現するのならはお茶目。

「退屈と言われても……」

僕はどうすればいいのやら。

自分で言うのもなんだが僕はとてもつまらない人間だ。

「あの学校ね、意外と裏は真っ黒なのよ」

「というと？」

「非公認サークルっていうのかしら、そのサークルはね、喧嘩や賭け事で随分とあくどい事をしてるようなの」

どの学校にも必ず不良といった輩はいるが、少々不良の領域を超えているような言い回しだ。

「触らぬ神に祟り無しだね」

「そのサークル、どれか一つ乗とりましょう」

今日はいい天気だ、こういう日はジョギングとかしてリラックスしたいね。

とか現実逃避を思わず実行しようとするが、彼女の扇子が僕の頬に減り込んで現実から逃がさんとする。

「聞・い・て・る・の？」

「あ、はい、聞いてますよ」

それよりもこの裏メニューに耳栓とか無いかな？

もしもあるのなら注文して耳栓をしてから話を始めたいと思うのだけど。

まあ……無いか。

「でもいいのかい？ 生徒会候補とかって耳にしたけど」
入学式で誰かが囁いていたのを覚えてる。

「ふん、別にいいわよ。生徒会の人から一年の生徒会長選挙に立候補するのはやめてもらいたいと言われたからね」

「一年？」

「知らないの？ うちの学校、生徒が多いから学年ごとに生徒会を

設けてるの。だから毎年三人の生徒会長が存在するのよ。それに加えて総生徒会長も選ばれるらしいわ」

へえ、そうなんだ。

学校資料つてのは一応渡されたけど今頃僕の部屋の片隅で瀕死の重傷を負っていると思う。今日、僕が帰宅したら殉職かな。主にゴミ箱へ搬送だ。

その前に生徒会について一度目を通してはみるとするか。

「二年、三年は今月に選挙。一年は来月に選挙なんだけど、元二年生徒会長から言われてね。私の家柄は極道みたいなものだから印象が悪いのでしょう。むしろ一時期はそうだったから否定はしないわ」
極道ね……。

先ほどにて護衛やらベンツやらそういったものを簡単に用意できるような家となると、連想は大富豪の娘だったのだけれど、極道のほうでしたか……。

驚いた？ そう問われて僕は首を横に振る。

ちよっとした強がりかそうさせたのかも。

「でもさ、だからっていくらなんでも酷くないかなそんな言い方は」
「その人はどうせ生徒会長に立候補して三年生徒会長になると思うから、私みたいなのが一年生徒会長にでもなったら嫌なのよ。聞いた話だと他の立候補者と比べると確定したようなものらしいし」

選挙の前に芽は摘んでおくってか。

「それでも選挙に出て見返してやるのはどう？」

「嫌よ、それよりもあの生徒会長と生徒会に思いつきり迷惑かけるほうが面白いわ。目標はサークルを全て支配して学校を裏で操ってやるの！ 裏の生徒会を作るのもいいわね……」

駄目だこの子……なんとかしないと手遅れになる。

「そして校長も弱みを握って学校を掌握！ 私の高校三年間はバラ色よ！ 喜ばない、貴方も私の喜びを共有できる資格があるのよ」
拒否権は今日のコーヒー代を僕が負担で手を打ってもらえないかな。

言いたい事は全て言い終えたのか、彼女は扇子を閉じて満足そうにふふんと鼻息を立てる。

「明日から動くわよ」

嫌な予感しかない学校生活、明日からきつと鬱になるに違いない。

そうしてこの際ついなので彼女を送るべく僕は少々遠回りなど関係無しに彼女と肩を並べて帰路についた。

大通りを越えて住宅街に入ったところで塀が聳え立ち、しばらく右には彪光、左には塀という妙な状態で肩を並べて、本当にここ住宅街なのかと辺りを見ました。

右側は普通の住宅街だが、左側は僕の身長を軽々と越える塀があってこの先はどうなっているのが少し気になるね。

「どうしたの？」

「いや、この塀高いなあって思ってた。ここ、どこかの施設とかあるのかな？」

塀が高いほど中に建つ建物の重要さが解る。

病院施設とか研究施設とか、さ。こういう鼠色したコンクリート以外何物でもない塀が囲むものってそういうものが多いだろう？

「私の家があるだけよ」

「……嘘」

「本当よ」

「マジ？」

「マジよ」

そうして歩く事数分後、見事といたくなる特大の門。木製の門は洪くていいね、それに小鳥遊という表札の隣に黒服の人が一人。

彼女を見るや深々と頭を下げてお帰りなさいませお嬢様、だとさ。「送ってくれてありがとう、また明日ね。楽しみで眠れないかも…

…ふふ……」

不敵に笑う彼女を見送って手を振ったが、門が閉まると同時に僕はここにるのがまったく場違いな気がしてそそくさとその場を去

った。

黒服の視線が背中に突き刺さってるのがやけに気になったせいで歩調はやや早く。

少々彪光と僕は友達関係であるとしても釣り合わない気がする。幼い頃はまったく彼女の事なんて何も知らなかったけど、こうして今の彼女を見てみるとこの僕よりも高い塀が“月とすっぽんだぜ”と言ってくるようだ。

次に彪光と会ったら緊張しちゃうかも。ちょっと軽く身体に接触でもしたら黒服に襲われたりして。

なんちゃって、いや……ありうるか。

まあそれはいいとして、僕は歩きながら考える。

橙色に染まり始めてる空を見上げて僕は溜息を空へと溶かして呟いた。

「面倒な事になりそうだ……」

嫌な予感っていうのはよく当たる、本当にね。

肆

一番後ろの窓側端の席っていうのは、窓の外に広がる晴天が授業の邪魔をしてきてなかなか集中できない。

飛行機が飛んでいるのを見ると見えなくなるまで無意識に追ってしまっし、校庭で体育なんかしていると黒板なんて見ているより退屈しない。

かといってずっと窓の外を見ているのも問題であり、授業終了まで残り数分つてところで僕のノートは真っ白。慌てて黒板に書かれている数字と数式という呪文を書き写し終わると同時に授業終了、今日はどの授業も同じような状態ばかりだった。

授業中、何度か周りとコミュニケーションを取ろうと思ったが、僕の隣に座る眼鏡が良く似合う女子生徒はどうにも話しかけるには彼女の放つ威圧感が壁となって言葉が通りそうに無い。

ならば男子生徒、そう、男子生徒との会話なら出来そうだと目の前に座る男子生徒にでも声を掛けてみようと思ったが、このクラス一番の巨体で強面。オールバックが良く似合う格好良いが近寄りがたい男子生徒だ、話しかけたらもしかすれば僕はこの世から消えてしまつかもしれない。

徐々に構成されていくクラスでの所謂グループ作りに乗り遅れつつ、ならば彼らを取り込めば一つのグループじゃないかと考えたところ引き入れる人徳も話術も無い。

言い訳をするならば隣の彼女、僕は女性への接し方には些か疎い面があり、目の前の彼は先ほども思っていたように近寄りがたい、というかもう正直に言うとは怖いのだ。

という事で現状維持を自分に言い聞かせる。

残った斜め右上については入学早々に授業をサボっているのだからそれはまた今度。名前から外国人だったがこの国なのかは知らない、自己紹介の場でもそこにいなかったからね。アンナ、とかいう名前

で肩に掛かる程度の金色ショートヘアに碧の瞳が印象に残っているからはつきりと憶えている。

昨日はきちんといたが、今日は午前と午後一時間のみ教室にいて残りの時間はどこかへ消えて今も彼女の席は空席だ。日本の授業にまだ慣れてないのかもしれない。

ようやくして授業が終了するとまだ黒板に書かれている呪文を書き写していないのに消し始める教師。

「まっ……」

待つてくさいと言ったところで教師の鼓膜に僕の言葉が届いたときにはどこまで消されてるかには想像が出来る。

つまり言うだけ無駄、諦めるしかないね。

「貸してあげる」

すると隣に座る女子生徒はノートを差し出した。

「あ、ありがとう」

意外、うん、すごく意外だ。

名前はなんだったかな……と脳内をかき回すがノートに名前が書かれていてすぐさまに頭へ送り込んだ。

名前は柳生秋葉、言下に柳生さんと付け足した。

こうしてクラスメイトとの交流を深めていくんだなあなんて思いつつ早めに書き写して彼女へと手渡した。

彼女はノートを受け取るとそそくさと教室を出て行く。

一応……交流を深める第一歩にはなっただんじゃあないかな。

これから少しずつ会話に挑戦してみよう。

残る問題は目の前に座る男子生徒だが、何事も挑戦だね。

名前は……服部新蔵、だったはず。むしろ今ここで「今日の授業難しかったね」とか「部活どこか入ってるの？ 体つきがすごいねえ」なんて言ってみようかな。

すると彼は席を立ち、ゆっくりとした歩調で歩いていき、僕をちらりと見ては静止。

「……」

「……」

何か僕は悪い事をしたのかな、もしかして彼は思考を読み取る超能力者で彼を強面とか怖いとか思っていたそれらは全て筒抜けだったとかだったりして。

……んなまさか。

でもどうして静止する？

もしも気を悪くしたのなら僕はここで席を立ち、床に両手をついて日本伝統である一番の謝罪する姿勢、土下座を披露してみせよう。

などと考えていたら彼は再び歩数を刻みなおして教室から出て行った。

……何だか意味深だ。

とりあえず今日はもう帰る事意外何も無いので僕も教室から出るでしょう。

暇なら掃除を手伝ってとか言われたく無いしね、でもちよつとはそういう交流でクラスメイトと溶け込みたいかなとか思ったり。

教室から出て歩数三步目にて、後ろから肩を叩かれる僕はその肩を叩いた感触が固いものだったのである程度予想して振り返った。

きつと彼女がいるはずだ、とね。

もはや避けようにも避けられないのかも。

「行きましょう」

彪光が予想通りいて、彼女は扇子を振って華麗に開く。

今日は別に大して暑くはないが扇子を開いたら振るのは誰もがやってしまうもの。それが扇子を持つものの醍醐味。

クラスはどこ？ という質問に対しては三組、と答えた。

僕は七組なので遠からず近からず。

「それで、行くなってどこに？」

僕の質問は彼女の背中に当たるも彼女はそのまま歩き出す。

行き先は屋上、僕の質問は解消されたが次は何をするの？ と質問したい。

昨日の話からするとサークルを全て支配するとか何とかだが、屋上でそんな事は出来ないだろう。

屋上には少女が一人、それ以外は誰も無し。

金髪の髪が見ていて眩しいなと思いつつ、その少女はどこかで見た事があると脳内をかき回してみると、ああ——今日は最後の時間サボってた生徒じゃないかと思いつく。

詳しく説明するならば僕の右斜め上の席に座る生徒、外国人。胸の大きさは彪光より上、だけどそんなの口に出して言えない。

「アンナ」

少女は振り返りこちらを見てくるその碧の瞳と僕の視線が合い、しばらく釘付けになってしまう。

吸い込まれそうなくらいに魅力的な瞳を持っている。それに整った顔立ちが尚一層引き立てて綺麗という二文字を構成しているのだ。

「あやみちゅー」

惜しいが発音は中々だね。

アンナという名前、外国人、記憶にある彼女の容姿からクラスメイトで間違いないがどうして屋上にいるのだろうか。今日の授業も後半は出席してなかったし。

「紹介するわ。アンナ・アイベックス、海外と日本を行き来してて二年前に日本に永住が決まったの。私の友達よ」

どういう経緯で友達になったのやら。

こちらへと歩み寄り、彼女は僕に抱きついてくる。

「ほんまよろしゅー。しえいしえい」

なるほど、アメリカ流の挨拶だ。

言葉はどうしてか方言っぽいんだけど、てかしえいしえいって謝謝？ 日本と中国を間違っていないかな。

出来るならばもうちょっとこうしてたいが数秒経つと彪光の眉間がぴくりと動いたので離れておく。

「グローブ持った？」

「イエス、揉みマシタ」

「グローブ……？」

持ちましただるもう、でも可愛い。

二人の会話に些か妙な単語が含まれていたので思わず言葉に出した。

アンナは小さな鞆からグローブを取り出して見せてきたが、ちょっと待つて欲しい。

「何にそれ使うんだ？」

「何ってねえ？」

「イエス、ねえ？」

二人はお互いに顔を見合わせて、同時に僕へと視線を送った。

これじゃあ僕がグローブに関して疑問を抱くほうがおかしいみたいじゃないか。

それに先ず何をするかも説明してもらってないし、説明される前にグローブを取り出した時点でもうおかしい。

「殴りこみ」

そんな当たり前でしょみたいな顔で言われても。

「カチコミね。たまあとつたるぜヨ、兄貴」

兄貴って言うな、僕はどこの組にも属してない。

それにたまあとつたるぜよとかその魅力的な唇で言うのは止めようよ。

「一旦落ち着こう？ 後先考えずに行動するのは駄目だと思うんだ」
ほらそこ、ジャブの練習するんじゃないで。

彪光も「いい拳ね、さすが鉄拳のアンナ」とか彼女を褒めるんじゃないで止めさせて。

「考えてるわよ、ほらこれ見て」

彼女はいくつかの写真を懷から取り出して僕へ手渡した。

どこかの部屋へ入ろうとしている女子生徒が写った写真だ。よく目を凝らしてみると扉のプレートには第二資料室と書かれている。

よく撮れてるでしょ、と自信ありげな表情。まあ、よく撮れてるよ。でも学校にカメラを持ってきたりこういうの撮ったりって高校

生になつたばかりの女子がやる事かね。

さてさて写真についてだが、校内は広いので第二資料室がどこにあるかはまったく解らないが、別にそこがどうかしたのかなという疑問が一つ。

この女子生徒は何か用があつて入つたのかもしれないし特に問題などはない。

「ここね、聞いた話だと使われなくなった資料を保管するためにあつて生徒が入る事は先ず無いらしいの」

ふうん、それなら入ってみようとかちよつとした好奇心が彼女を動かしただけなんじゃ？

「様子見してみたら数時間は出てこなかったわ、変でしょう？」

その人はよほど資料が好きなんだよきっと。

歴女とかもしかしたら資料萌えとかかもね。資料を見ると興奮して没頭して時間と我を忘れてしまふに違いない。

「鍵が開いてたら中をそつと覗いてみたらね、誰もいなかったの」

「……もしかして幽霊？」

「やだら怖いべ、兄貴」

アンナの言葉でゾツとした背筋は一瞬で治まった。

もう東北の方言とかも混ざっちゃってるね、それと兄貴って言うな。

「違う違う、ここに何かがあるって話。きつとどこかのサークルが隠し部屋を勝手に作ってるのよ」

そんな馬鹿な。

苦笑いを浮かべる僕に彪光は不機嫌そうに扇子を閉じると踵を返して、

「百聞は一見に如かずよ」

そう言つて屋上から出て行くので僕とアンナは後を追いかけた。彼女にグローブ置いていったら？　と言つてみるも首を横に振つて大事そうに鞆へ戻す。

暫し歩くが中々到着しないところから校内はやはり広いなと改め

て実感。中庭なんか僕が中学の頃に通っていた校庭くらいある。家が軒建つかな、十軒ほどは余裕であろう。

近道なのか、その中庭に入って横断。木製の足場があつて上履きは履き替える必要は無い。所々にベンチがあり、ここで昼食を頂いたらいつもより美味しく味わえそうだ。

緑の香りを鼻腔で味わいながら歩くのは清々しいがやや歩調は速め。

もう少しゆっくり歩いてこの香りを味わいたいものだが、言っても聞いてくれないだろうね。

「兄貴、おいしい香りでヤンス」

そうだね、この香りは美味しくも感じるね。

それともう兄貴でいいよ……。その呼び名で定着しちゃったようだし。

中庭から再び校内へ入ってさらに進行し、やや奥のほうへと行く。と日陰が目立ち始める廊下。

窓の外を見ると木々が多く茂っていてここらは陽光がそれほど射してこないようだ。

徐々に不気味とさえ感じてきた廊下をさらに進行するとそこに第二資料室はあった。

人通りも少ないほうで隠れてサークル活動なんかするには取って置き場所ではあるが、まだ断定は出来ないね。

「鍵は……空いてるわよ」

中へ入ってみると壁など見えないくらいに本棚で埋め尽くされて、埃臭い空間に思わず口元を手で覆った。

「けほっ……きつと何かあるはず」

といつてもなあ……。

辺りを見回しても本、本、本。

アンナはとりあえずジャブを止めてくれないかな、埃が舞ってる。警戒しなくても何も無いと思うよ。

それにしても暗い。

窓の外には丁度大木があるためにこの部屋は先ほど通った廊下よりも暗い。今はまだ午後四時くらいだというのにそれらしい時間などこの部屋には存在しない。

「床を見て」

すると彪光は床を指差した。

薄く積もっている埃の上は足跡が刻まれていた。換気もしていないこの空間では当然であろう。普通よりやや小さめの足跡がいくつもあり、この小さい足跡の主は写真の女子生徒を連想させる。

「なんか奥に続いてるね」

足跡を辿ると奥の窓側まで続いており、そこから右へ。

僕達もその軌跡を辿ってみるがもちろん本棚しかない。

「幽霊デスな……兄貴……」

「幽霊は足跡残さないよ」

本棚を調べてみるとするか。

プリントの束や本が詰め込まれており、その中でなんとなく本を取ってみる。

古典、それもかなり劣化していて本を開けば紙が破れる嫌な音が聞こえ出すのですぐに閉じた。

閉じると同時に埃が舞い、咳き込んで涙目。

何でこんな目に遭っているんだ僕は。

「怪しいわねこの本棚」

彪光は扇子を開いて口と鼻を防御しながら言う。

僕にも扇子の予備があつたら分けて欲しいな。

彪光はそつと指差し、僕らはその指差された方向へと視線を辿ってみると到達したのは本棚の上。

「隣の本棚見て」

言われるがままに視線を移動すると、隣の本棚と今僕達が調べている本棚……高さが微妙に違う。

「同じ本棚なのに、この本棚のほうが高いわ」

でもそれは設置したときに何か挟まったりしたんじゃないかな。

本棚の下を見てみると少々床と隙間があるが覗いても暗くてよく見えない。何か本棚の下にあるようだが別に気になるものではないな。

「それにここだけ埃が薄い。押してみよう」

埃塗れの本棚を？ 冗談だろ？

「押しなさい」

冗談じゃないですぬすみません。

言われるがままに押してみるが、びくともしない。

「……お、重い！」

ぎしぎしと本棚が音を立て、アンナも僕の背中を押して手伝ってくれてる（？）が動く気配など無し。

当然の結果だ、だってそうだろう？

本棚は壁に接している、壁ごと動かせるような怪力が無ければ押して何かが起きる結果など見出せない。

「回転式なのかも」

その発想はどこから来るのやら。

先ずさ、僕達が今やろうとしている事は隠し部屋でも探してサークルを見つけるみたいな事、学校を改築しなければ無理だと思うよ。押すだとか回転式だとかはもう十分だ、そんなのあるはずが無いのだからここは引き返して喫茶店にでも行きたいね。

「ワタシ、右、押しマス」

「なら貴方は左側を引いて」

どうしてもやるといふのならやってやるけど、満足したら帰ろうね。最初は右回りを意識して押し、次は左回りでやるらしい。

当然彪光は少し離れて見学。僕らは埃まみれになるんだけど、君は高みの見物かね。まあ、いいけどさ。

僕はアンナに視線を送り、せーのっという気の抜けた掛け声をしてお互い押し引きをする。

ほら動かない、帰ろう。

そう言うつもりだった、本棚はびくともせずに溜息をつくはずだ

ったのに、気になる結果はというと本棚はゆっくりと右回りに回転していったのだ。

「おおおお……！」

押すと同時に思わず喉の奥から声が漏れていく。

思わぬ結果だったのだ、回転式の本棚に隠し部屋とかどう考えても学校にあるはずが無い。現実を直視してそれ以外など無視する僕をつまらない思考はここで一部分だけが砕けた瞬間である。

「兄貴！ オットめご苦労サマーでござル」

「僕は刑務所には入ってないよ！」

言いたかった事はなんとなくわかるがね、もうちょっと日本語を学んで欲しいな。

「さあ、行くわよ」

彪光は今流行のどや顔で先行。

この本棚、僕とアンナが動かしたんだけど。

せめてよくやったとかの一言くらい欲しかったな。

伍

アンナは靴からグローブを取り出して装着、準備万端だね。

奥へ進むと目の前には壁があり、行き止まりかと思いきや扉が傍にあった。

扉の隙間からは光が漏れており、微かに音も聞こえる。

そつと入る？

勢い良く入る？

彪光は扉を前にどう行動するのか、僕ならそつと入るほうだが。

彼女は小さく呼吸をして、扇子を閉じる。

そして勢い良く扉を蹴破った。

ふむ…… やっぱり君は気性が荒いというか、豪快というか…… まあそういう面も魅力的だけど。

「ちょ！ な、何よあんたら！」

中には女子生徒が一人、写真の人だ。

「騒ぐなクズが」

アンナはジャブを開始。

彼女がその行動をとるだけで威圧が生まれる。

それにしても妙な部屋だ。広さは畳四畳ほどくらいかな、壁にはパソコンのモニターがいくつもあり、彼女は一台のパソコンの前にいた。きちんとしたパソコンデスクであり、しかも扇風機付きで居心地は良さそうだ。

蛸足状態となっているコンセントが床にいくつも伸びており、この部屋での電力消費量は一体どれほどに及ぶのやら。使用した電力の支払いは学校だと思うのだが、やりたい放題という言葉を実現させたような空間だ。

窓は無くとも照明が設置されているわでとても彼女がこの空間を作ったとは思えない。

「貴方、非公認サークルの一つね？」

「……そ、それがどうかしたのかしら？」

もはや否定は出来ないからか、隠さずに言う女子生徒。同じ一年……だったとしても人数が多すぎてどのクラスかは解らないが、一年が一人で非公認サークルの活動しているとは考えにくい。学年は二年か、三年かも。

「単刀直入に言うわよ。このサークルは今日から私が支配する」

「そ、そういう事……サークル狩りがまさかうちに来るとはね……」
サークル狩りという単語、彪光がやろうとしている事は彼女らの業界ではそう呼ばれているようだ。

「ははっ！ でもそうはいかないわよ！ この改造エアガンにスタンガン！ それに催涙スプレーもあるんだから！」

すると彪光はアンナへ視線を投げ掛けた。

首を軽く振って「行け」の合図。

アンナはステップを踏むと、瞬時に女子生徒の懐へと距離を縮め、女子生徒が右手にエアガン、左手にスタンガンを構えても時既に遅し。

「はぎゃ……！」

女子生徒の顔面にアンナの拳が減り込んだ。

ぐしゃり——そんな音が鼓膜に届き、体中に鳥肌が駆け巡る感触に陥る。

「あ、あぎゃ……。は……ひ……」

鼻から溢れる血が彼女の顔を染めていき、もはや反撃どころではなく女子生徒は武器を落とした。

「い、いたひ……」

思わぬ攻撃だったのだろう、呂律も回らず焦点も合っていない。それほどの打撃、あのぐしゃりという音がアンナの攻撃力を教えてくれる。

女だからといって攻撃力が無いとは限らない、筋肉の質や体重移動に鍛え方で変わる拳の固さ、それらが合わさるとたとえ女性であっても攻撃力が出るのだ。

アンナの戦闘スタイルはボクシングが基本のようステップは軽やか、それに構えも綺麗で先ほど放った懇親の右ストレートは綺麗だった。

完璧な右ストレートだと、素人の僕でも解る。

その右ストレートを顔面で受けた女子生徒には同情してしまう。

「にや……にやんなの……あんた……」

膝をついたところで止めのアッパーで顎を捉えた。

「アンナね。よろしゅー」

その言葉、もはや彼女には届いていない。

床へと倒れて戦闘不能なのは一目瞭然。痙攣しているようにも見られるが見なかった事にしよう。

とりあえず女子生徒を壁側へと運び込んで凭れさせて、ポケットティッシュを持っていたので鼻に詰めて鼻血は止めておいた。

「何も殴らなくなつていいじゃないか」

「相手は武器を持っていた、だからこちらはそれなりの対応をしたまでよ」

それなりの対応……ね。

監視はアンナが引き受け、只管に彼女の顔面めがけてジャブをしていた。ほんの少し前に行くだけでその拳、女子生徒の顔面へ再び減り込むから止めたほうが良いと思うな。

逃げられないように上着は脱ぎ捨てられたのだが、僕には凶器が置かれているようなものだ。視線は決して女子生徒の胸へは向けないでおこう、隣に立つ彪光が僕の視線を何度か見て確認しているようだし。

女子生徒はまだ起きる気配が無いのをいい事に、彪光はパソコンを操作して何やらあくどい事をしている様子。

パソコンの操作は慣れているようで、キーボードを打つ指はぎこちなさがなく流れるように動いていく。

「へえ、そいつ……生徒会の行動とか他のサークルの情報をかなり集めてるようね。保身のためかしら、私達のような存在は流石にイ

レギュラーだったようだけど」

悪魔のような笑顔でパソコンを操作している彪光には少々距離を置いて僕は周りに置かれている物を調べる事にした。

他のテーブルには小型の監視カメラがいくつも置かれており、何に使うのやらとそれらを僕は持ち上げた。

すると壁に設置されていたモニターの一つが連動して動き、僕の顔が映し出される。線は繋がっていて使えるのは解ったが何に使うのかが問題だ。

小型の時点で見つからないように、ってというのがこの監視カメラの補足説明なのは明らか。

良からぬ事に利用されるに違いない。ここで全部壊しておくべきかな？

「ふむふむ、二年松島音々子か」

女子生徒——松島音々子から剥ぎ取った上着のポケットに入っていた学生証を取り出して彪光はそれを見ながらキーボードを打っていく。

「やっぱり単純よね、パスワードなんて大抵は生年月日を使うもの。まだまだデータを取り出せるわ」

彼女がパソコンに夢中になっている一方で、小さく呻く声が鼓膜に届いた。

音々子……さん、目を覚ましたのかな。

「ん……ここ……あぎゃ！」

上体を前に起こした結果、ジャブをし続けていたアナナの拳が再び彼女の顔へ減り込んだ。

「は……はひっ……」

鼻にはティッシュを詰めておいたものの、更なる出血がティッシュを赤々と染めていく。

僕は慌てて新しいティッシュを渡し、彼女は新しいティッシュに取り替えて鼻に詰め込む。

落ち着いたところで音々子さんは口を開いた。

「小鳥遊……彪光っ」

「あら、私を知ってるの？」

「当然よ、あの小鳥遊家の娘ですもの。情報屋の私が知らないわけが無いわ」

なるほど、そう言われれば情報屋らしい部屋にも見えてくる。

「その小鳥遊家の娘がこんな事してるとわね、くふ……くふふっ」
「弱みでも握ったつもり？」

「いいのかなー、彪光ちゃん？」

弱みを握ったぞと言いたげなにこやかな表情で彼女は調子に乗っていたが、彪光はアンナに視線を送る。

ああ……駄目だこの人、これから可哀想としか言いようがない状況に陥る。

「くふ……ふ？」

アンナは彼女の腰を掴んで持ち上げて逆さまの状態にした。

これからやられる技を予測するに、パイルドライバーという技が見られるのではないかな。この目では滅多に見られない技だ。

「これからアンナは貴方に素晴らしい技をかけてくれるわ、喜ばないさい」

「ま、待つて！ ご、ご、ご、ごめんなさい！」

「はあ？ 聞こえないわね」

「正直、調子に乗ってました！ す、すみませんでした！」

「アンナ、私がやれと言ったら全力で……ね？ 一ヶ月は病院から出られないくらいに」

「了解でゴザる！」

音々子さんの顔から血の気が一瞬で引いていくのが解った。

止めるべきかと考えるも、止めたら止めたで矛先が僕に向けられるかもしれないので僕は動けずにいた。

だってさ、アンナに勝てるわけが無いし何より彼女を逆さまで持ち上げている状況だ。その腕力もすごいが下手に止めに入って何かの拍子に音々子さんがパイルドライバーされたら結局病院送りだ。

「な、なんでもしますから勘弁してください!」

「なんでも?」

「は、はい! な、なんでもしますうう!」

ああ、駄目だねこの流れ。

彼女は開放されると共に何かを犠牲にしてしまっただろう。

「そう、ならば私の下僕になりなさい」

アンナに視線を送ると音々子さんはようやく解放され、しばらく放心状態でいた。

「ま、私も貴方の弱みなら握ったからお互い様よ。貴方、パソコンの中にすんごいの保存してるわね」

「へ……?」

「にゃんにゃんフォルダ、見つけたのよ。このド変態」

そうか、さっきのパスワードがどうたらとかで見つけたんだな。

音々子さんは顔を真っ赤にして、

「み、見たの?」

口をぽっかりと開けて驚愕に顔を満たしていた。

「もう全部見たわ、それに全部コピーしてそこにあったUSBメモリに送っておいたから。これは頂いておくわ」

にゃんにゃんフォルダとは何かと好奇心が沸いてくるが彼女の様子を察するに、よほど見られたくない代物ならばこの好奇心は心中で潰しておこう。

「もう、なんていうか生きててすみませんでした……。なんでもしますのにゃんにゃんフォルダだけは公開しないでください……」

泣きながら懇願する彼女を見て、彪光はこれ以上となく嬉しいのか満面の笑みを浮かべた。

「フン、解ればいいのよクズが」

僕は結局何もしてないけれど、こうして僕達はサークルを手に入れ、音々子さんを従えて隠れ家も手に入れての万々歳状態だった。

音々子さん曰く、学校内ではこのような隠し部屋が多く、学校設立者の気まぐれで作られたのだとか。今は隠居しているようで学校

側は隠し部屋の存在を知らないらしい。

しかしながら今日のような方法は何とも気が引けるね。

僕がこれから彼女の抑止力となれば、サークル狩りをしていく事で学校は良くなりそうなきもするが……。

一つだけ解る事は、僕らの未来に正義は無いって事だ。

伍（後書き）

第一章、ここで終了です。次から第二章に入ります。

壹

一週間の経過と共に学校はいつもよりも騒がしくなった。あたりを見回せばそれはすぐに解る、生徒会選挙が始まったからだ。

とはいえ僕らにとって生徒会という存在は今や敵、どの生徒会長候補が好感持てるとかあの人が生徒会長になったらこの学校は良くなるなどかという思考を持ち合わせたとしても意味など無い。

現在は四月中旬、五月上旬には二年と三年の生徒会長が選ばれてその後一年の生徒会長を決めるらしい。

二年、三年の生徒会長候補をまったく知らない一年生にどれほど自分らの情熱と応援したくなる公約を訴えて、一年の票をどれほど集められるかが重要だとか。

最近によく生徒会長になったら何々をするとか、何々な学校を目指すとか立派な文章が綴られた活動内容のビラを受け取ったのが度々あった。

近くにはマイク片手に訴える候補者がいたりでどんな顔ぶれかと見てみると中々の美人揃い。

まあそれはいいとして、学年毎に一人の生徒会長ね……。

確かに人数の多い学校ではこういう方法は有効かもしれない。学年毎に生徒会長がいて、仕事を分担していけば、ぱっと見て人、人の群を成すマンモス高でさえなんとかなるのだろうね。

気になるのは総生徒会長とかいう存在で、それは既に決められているらしいが公表されていないので誰なのかは解らない。

担任曰く、全ての生徒会長が決定してから総生徒会長も公表されるため、少なくとも後一ヶ月以上は解らないって事だ。

身近に総生徒会長がいて気づかないうちに隠し部屋を見られてたりしたら困るなあ。

隠し部屋に行くのなら警戒して行かねば。

といつても第二資料室へ入るのも、窓の鍵を開けておいて外から入れるようにしたので見つかる可能性も低くなったがね。

茂みに脚立を隠しておいていつでも脚立を使ってすばやく窓から侵入可能、脚立には紐を括りつけていて侵入後は紐を引っ張って回収。

更には周囲にセンサーを仕掛けており、人が探知されたときは壁に設置しておいた注意して探さなければ見つけれないくらいの小さな装置が赤くなり、人気が無ければ青、念には念をつてやつ。

これも彪光の案で何をやるにしても抜け目が無い。

さてさて、この一週間はサークルを手に入れたにも関わらず他のサークルに殴りこむ事も無く特に大胆な活動はなされていない。

とても良い学生生活を保てている、素晴らしいね。

僕が先生だったらよく出来ましたの判子を押してあげたいくらいだ。

「監視カメラの設置は済んだ？」

けれども何やら判子を押すにも保留にするべき行動を着実にやっている。

嵐の前の静けさ、そんな言葉が今の状況なのかもしれない。

「は、はい……全て終わりました」

なんていうか、この一週間で大きく変わったのは音々子さんが立派な奴隷として働いてる事。

最初の内はささやかな抵抗をしていたりもしたが、その度に彪光はにやんにやんフォルダと口にして、音々子さんは半泣き状態で従うの繰り返し。

調子に乗った彪光は何かとぺちぺち扇子で叩いたりで見えられない。

三日ぐらい経つと抵抗すらなくなつて、そんな音々子さんを見ていたらあまりにも可哀想なので僕は友達と触れ合うように接しているが、彪光はそんな僕を見て苦い顔をする。

「音々子さん、キリがいいしこころで休憩しません？ ほら、お茶

も用意しましたよ」

壁に立てかけていた丸型テーブルを部屋の真ん中に置いていつでも一息つけるようにしておいた。

お茶を沸かすポットも茶葉もあってこの部屋は本当に何でもある。音々子さんの努力の結晶といったところ。

コップは流石に四人分なんて無かったので、音々子さんがわざわざ僕ら三人分のコップを用意してくれてありがたかったが、彪光は当然の配慮よ！と扇子を開いて言ってたっけな。

「駄目駄目、そんなんじゃ」

すると彪光はいきなり僕へ駄目出し。

「いい？ この子にはね、もっと罵って言わないと駄目なの！ ほら、休憩を与えてあげるわクスが！ さっさと座りなさい！」

彪光は扇子を閉じて硬さを引き出し、音々子さんの顎を扇子で持ち上げてそう言うのと、

「は、はい……ご主人様……」

頬を赤らめて音々子さんは素直に従う。

どこか嬉しそうなのは気のせいではないようだ。

「調教するの苦労したんだから！」

調教ね……。

ま、まあ……そういう人ならば仕方が無いけど、僕は言いづらいから罵る役割は君に任せるよ。

「ウチは殴るの、ちよつと痛すぎるカラ快感無いラシィでアルね」

そつち方面の人でもアンナの拳は流石に快感を得られないようだ。ならば彪光の扇子で頬を叩く行為が丁度良いのかも。

現に目の前でやられてなんだか気持ちよさそうな表情をしている音々子さんがいる。

「それで監視カメラなんて仕掛けて何するつもりなんだ？」

四人が席に着いたのを機に、今の状況を見て僕は自分だけ置いてけぼりな状態だったので言ってみた。

どこから手に入ってきたのかは知らないが、どうせ良からぬ方法

で手に入れたに違いない。

「別に監視カメラを校内の至る所に仕掛けただけよ、生徒会が活動する時に役立つわ」

「ふうん、生徒会の活動を妨害とか？」

「うん、そうよ」

当てずっぽうで言ったのに当たっちゃったじゃないかも。

「で、でも生徒会を敵に回すのは……」

音々子さんは乗り気では無く、僕も同感である。

「見つからなければ大丈夫よ」

僕はどうするべきだろう、彼女の将来を考えてゆつくりと時間をかけて慎重に説得するかもしくはこれが僕らのサークル活動なんだと開き直って彪光の言う準備とやらを手伝うか。

無論、前者である。

とはいってもどう説得すればいいのかが大きな課題として立ちただかっている。

そりゃあ悪戯とか可愛い領域から脱していないならいいけれど、監視カメラを仕掛けて更にアンナがいる時点で悪戯なんていう領域は既に脱している。

もしもアンナを悪いように使うのならばそれだけは全力で阻止しなければ病院送りの大量生産になりかねない。

「余裕を持ってゆつくりやりましょう、ね？」

ね？　じゃないよ。

「他のサークルからの攻撃も視野にいれておかないとね、第二資料室の鍵はかけておいたほうがいいかしら」

窓から入れるし、それもいいかもしれない。

音々子さん曰く、第二資料室は鍵の紛失すら気づかれなくらいに利用も少ないのでこのまま鍵をかけて自分達で鍵を所持していれば開かずの間になるわけだ。

一々ここへ来るのは外から遠回りする事にはなるが、この隠し部屋が見つかる可能性は極力低くなるね。

「ダイジョブね、アンナ皆倒すヨ」

うん、すごく心強い。

心強すぎて別に攻撃されてもアンナがいれば大丈夫だよなんて言いたくなるが、多勢に無勢という言葉があるので無茶は言えない。彼女とて何人もの相手を一度に出来ないと思うし。

「アンナ、貴方は確かに強いけどなるべくは見つからずに出来るだけ対抗するような状況は避けたいのよ」

「他のサークルにも目をつけられたら連鎖が止まらないですしね」

「ならいつそのことひっそりとここでお茶を飲む会みたいなのはどうかな？」

その時、言下に彪光は口へと運びかけたお茶をテーブルへと勢いよく置いた。

お茶が飛沫として飛び、テーブルはお茶塗れに。熱いお茶の雫を受けた音々子さんは何故か気持ちよさそうだ。

「そんなおじいちゃんおばあちゃんみたいな会にしてどうするの？
ん？　ねえ、何か言ってみなさいよ。贓物ぶちまけてみる？　ねえ」

「ごめんなさい、反省していますのでどうかその扇子で頬に減り込ませるのは止めてくれませんかね。」

「ごめんなさいを連呼すると頬から扇子を離して彪光は扇子を広げて扇ぎながら再び口を開いた。

「これからの行動としてはね、先ずは立候補者達の妨害をしましよ
う」

相手の事を考えると中々に賛成しかねる……。

「流石です、ご主人様！」

「あやみちゅ、ワタシもガンバよ！」

どうしてこうも僕は肩身が狭いのかな。

この中で僕は一番常識を保っていられていると思うのにさ。

「それに音々子、貴方は情報集めが得意なのよね？」

「はい、そうですご主人様」

「ならば公認サークルのほうで何か困っているサークルがあったら探して。それと目安箱の監視も忘れずにね」

その意図が解らず僕は質問を試みる。

「聞いていいかい？ 何をするかをさ」

公認サークルつてのが引つ掛かる。

また何かあくどい事でもやらかそうつていうんじゃないだろうね。

「目安箱が置いてあるのは解るわよね？」

「ああ、廊下にあったの見た事あるけど」

「今は生徒会の奴らはまだ決まっていけないけど、立候補者達や生徒会補助役員つて奴らが目安箱を管理して活動してるのよ。だから生徒会役員が決まっていなくても目安箱は置かれてるの」

なるほど。

でもどうして目安箱の話を？

そんな視線を投げ掛けてみると彼女は溜息をついてから口を開いた。

その溜息はそろそろ感づけよって意味なのか、説明が面倒なのかは定かではない。

「生徒会の目安箱に投げ込んだものを先に私達が回収して解決してやるの。もちろん物理的な妨害もするわよ。同時に問題を解決して公認サークルとつながりを持てれば動きやすいもの。仕事を無くしてやれば形無しよ！」

つまり生徒会への妨害と公認サークルとのつながりを兼ね備えての行動というわけか。

これなら公認サークルには迷惑どころか助かるだろうし、生徒会も仕事が減って実は妨害じゃなくて手助けなんじゃないかと言いたいが、言ったところで悪い方へと方向転換したら困るために僕は口を塞いだ。

しかしながら物理的な妨害とは出来れば常識を逸脱するものではないようにしてもらいたい。

「もう大体は作戦も練ってるしね。音々子、とりあえずさっきの件、

頼むわよ」

悪い方へ方向転換は既になされているようで、僕は溜息をついた。そういう事ならお安い御用、そんな背中を見せてパソコンをすぐさまに操作する音々子さんは格好良くも見えるが、今までなんていうか悲しい部分ばかり見てたせいで残念だなあという感想。

何がどうなつてあんな、所謂マゾ体質になつてしまったのだろう。「とりあえずはそうね……目安箱は三年が担当しているものもいいわ。あのクズに痛い目みさせてあげるわ」

あのクズとやらは彼女が以前に話していた元二年生徒会長であるう。

今は選挙に立候補して三年生徒会長はもはや当確が目に見えているんだっけ？

「後は私が調べておきます、今日はもうお帰りになられても大丈夫ですよご主人様」

「そう、ならば帰るとしましょう。あとは任せたわよ、上手く出来ればご褒美もあるわ」

「ああ、頑張りますう……」

「ご褒美とは何なのかは知らないが知りたくも無く想像したくも無い。」

巻（後書き）

少し書いていてプロットの時よりもちょっと歪曲しちゃった感じで、テコ入れするかもしれないが見直しも済んだので一先ず投稿いたします。うーん、まあいいとは思っていますが。。。はい。

式

まだパソコンを操作する音々子さんを置いて隠れ家を出るのは些か気が引けるので何か手伝える事は無いかと聞いてみるが、彼女は一人でいるほうが集中していられるからと後押しされて帰路に着く。帰り道にて選挙に勤しむ人らを横目に僕は校門を出る。

その人らの中にはもちろん元二年生徒会長がいて、名前は御厨夏江と確認。

彪光もきちんと確認したであろう。

「御厨夏江……ね。あいつの五臓六腑を引きずり出してぶちまけて天日干ししたいわ」

「怖すぎる事を唐突に言わないで欲しいな」

彪光の恨みを買ったとなると御厨さんはこれからどうなるのか心配でならない。

だが心配するだけでは駄目だ。

彪光達の活動を止められなくなつて、やり過ぎないように押さえ込む事は僕にだって出来るはず。

最低でも御厨さんの五臓六腑を引き出してぶちまけて天日干しをするのだけは阻止しよう。

「アンナ、ガンバるよ」

「頑張らなくていいよ!」

「いいえ、頑張つて」

「ちよつともう……」

五臓六腑を引き出してぶちまけて天日干しという軌道に乗り始めたために軌道修正を試みるがくじけそうだ。

それから歩いて数歩目にてアンナはすぐ近くのアパートで別れた。彪光から聞くに、どうやら寮生としてアパートで生活しているようだ。寮の前にサンドバッグがあるのはアンナの私物としか言いようが無い。

彪光はこれからまた大通りを越えて住宅街までの距離。

だが遠くにはどこかで見たことのある車両が一台停車中。

僕の家は大通りまではいかない。

彼女とは途中まで帰り道が一緒なので僕と別れた後は車両で帰宅するのであろう。

彪光も車両を目視すると足を止めた。

「貴方の家、どこ？」

「え？ まあ……近くといえば近くだけど」

「寄ってもいいかしら？」

唐突にそんな事言われましても、と考えるものの特に困るようなもんも無いし断る理由も無い。

「別にいいよ」

「なら行きましょう、人ごみに紛れてそつとね」

どうやら車両の中で待機している護衛に気づかれないようにとの真意が汲み取れる。

護衛に意地悪でもしたいのかは知らないが、こうして彼女と友達として親睦を深める事で僕のサークルでの抑止力がよりよく働いてくれるのを期待しておく。

「まさか……この小屋に住んでるの？」

親睦は深まるどころか僕は心の中で今、大きな溝を作った。

「アパートっていう言葉知ってる？ 知ってるよね？ 知らないとか言わせないよ」

「それは知ってるけど、こんな二階建てじゃなくて何十階もあるのがアパートでしょう？」

「それはきつとマンションだ！」

彪光はすごい顔をした。

どうして僕はこんなすごい顔なんて単純な表現をしたのかというと、一目でわかるほど大量の驚愕と衝撃を大鍋に入れて混ぜ込んだら出来ましたというくらいに解りやすい顔だったからだ。

中へ招き入れると今度は、

「狭すぎるんだけど貴方って毎日こんな窮屈な部屋に住…… ああ、貴方は音々子タイプね？ 窮屈さで快感を得て過ごしてるのなら納得するわ」

「おいやめろ、窮屈さで快感なんて得ないよ。僕はそんな性癖の持ち主じゃないから誤解しないでくれ」

生きてる世界が違うってやつ。

僕にとっては風呂トイレ付きで六畳の空間というのは不自由なし居心地もそれなりに良く過ごしているが、彼女と僕とは広いという意味には大きな違いがあるので説明もしないでおう。何かとトイレや風呂を覗いて狭い狭い呟くので僕はお茶を用意して移動させて座らせる。

これ以上室内を見回られて感想を述べられたら僕の心が耐えられない。

「貴方って寮生じゃないの？ 寮生もアパートに住んでるらしいけど」

「僕は一人暮らしさ、学校側にも了承を得てるの。それなりの事情ってやつで」

「事情ねえ。差し支えなければ聞いてもいいかしら？ そういうの気になるのよね」

まあ話しても構わないが、気分が下落するのは僕ではなくて彪光のほうなのは間違い無い。

いいの？ 本当に聞きたい？ そんな質問をしてみると彪光は扇子を開いて頷いた。

まあ、それでも聞きたいのなら僕は一度お茶で口内と舌を潤してから口を開く。

「僕の両親さ、幼い頃に死んだんだ。交通事故でね」

彪光は開いたばかりだというのに扇子を閉じ、顎につけた。

弱々しく曲がる眉、それに今の仕草はどこか申し訳無さそうな様子。

気にすんなよ、って僕は眉毛を上げて表情で伝えておく。

「その後は養子として引き取られたけど高校受験あたりじゃあ関係は最悪。それで高校入学と同時に家を出て行ったさ。弁護士を通して養子縁組も解消、書類上だと世話してくれる人とか名前のみ借りたからそれなりに手続きはすんなりと終わったんだ」

「……でも生活はどうするの？ お金は？」

「そりゃあぶん取ってやったよ、遊んで暮らせるくらいにね。もちろん弁護士を通してだよ？ 金持ちだったのが唯一感謝できたかな」これにてそれなりの事情は終了。

誰かにこうして話すのは初めてだし、話す相手もいなかったからか心の中は泥酔をろ過したくらいにすっきりしてる。

僅かな沈黙の後にて、

「いいわね。貴方は自由を手に入れているの、それを実感して舌で転がして味わうくらいに堪能しなさい」

すかさず扇子を開いて彪光はそう言った。

彼女の言葉には自分は不自由だという意味が添えられている気がする。

「君は……」

「何？」

「いや、ごめん。なんでもない」

今の生活に不自由してる？

とか聞いてみたらどうなっていたかは定かではないが、護衛を無視して僕の住むアパートへ寄ったりとちよつとした反抗を見せる様子が聞かずとも彼女の中に渦巻く不満ははつきりとしている。

「変な奴。貴方の十二指腸でウインナー作りたくなつたわ」

今日はやけに言葉が刺々しい。

もしかしたら、苛ついているのかな。

すると彼女は扇子を閉じて眉間に当てて溜息をついた。

「ねえ……今日はどうしたの？」

さっきまで聞くつもりは無かったが、彼女の溜息が引き金となって口が動いてしまった。

僕は来客用ではなくお楽しみ用にとっておいたチョコのお菓子を添えて聞いてみる。

この際、彼女に差し出すのがお菓子にとっても良い選択だと思う。お菓子にとっても、って何だよ僕。

そんな自分へのつつこみを入れて話を聞く。

「別に」

「別に、にしてはおかしいよ」

「どこが？」

「どこが、って強いて言えばなんか発言が刺々しいし」

彪光は沈黙した。

それからお茶を飲み、僕も釣られてお茶を飲んで、また沈黙。

時計の針が唯一この空間に流れる音として漂う中、ようやく彼女は口を開いた。

「……私、来週誕生日なの」

「そりゃあ良かったじゃないか」

すると彼女は拳をテーブルの上に振り下ろした。

その先には僕が先ほど差し出したお菓子があり、ぐしゃりと袋の中身は粉碎された音が僕には悲鳴に聞こえる。

「十六になったら家督を継いで遺言が残されても？ それで家族関係が悪化しても？ 護衛が毎朝送り迎えして帰りはストーカーのように待ってても？ 冗談じゃ無いわ」

彼女は拳を高々と上げてもう一度振り下ろす。

その先にはやはりお菓子だ。

しかしそれよりも気になるのは彼女が口にした遺言という言葉。遺言という事はつまりだ、家督を継げと言える立場も考慮して大黒柱である父親を亡くしたようだが、彼女の先ほどの話からは様々なものが読み取れる。

今は余計な詮索などしないでおくとするがね。

「……ごめん。ちょっと鬱憤が溜まってた」

ストレスを少しでも解消できたようで何より。

殉職したお菓子はせめて口の中へ運んでもらいたい。

「でもいいの？ 僕に色々と話しちゃってさ」

「何か差し支えでもあるの？ 貴方は私の家柄は大体想像できてると思うし」

「そうだけど、いや、なんていうか……」

「よく誰かにぶちまけたいって時あるでしょう？ それがさっき」
解らなくも無い。

僕もそれなりの事情の結末を話したらすっきりしたしね。

「貴方に話すにはまだ早すぎたかしら？ 私達の交友度があるとしたら下の下？」

「いいや、中くらいかな？ 今もまだ上昇中」

彪光は笑った。

心から湧き出てきたかのような笑み、それはとても美しかった。

口へと運ぶはずのお茶を服に引つ掛けるくらいにね。

「熱っ……」

「もう、ドジね」

まだその笑顔が継続されていて、僕は参ったなとお茶をこぼした事に対しての言葉として誤魔化した。

僕の性格じゃ君の笑顔に参ったんだとは言えないわけで。

「これからはお互いぶちまけたい話があったらすぐにぶちまけましようっ？」

ぶちまけるは今日何度聞いたのやら。

そんな誘いの笑みと、彼女と交わす妙な約束も加わった笑みをしつつ僕は頷いた。

「そろそろ行くわ。またここ、来てもいい？」

閉じた扇子で扉を叩きながらは彼女はそう言い、
「いいよ、いつでも」

扇子を開いてのご帰宅。

一応、車両の近くまで送ってその日は彼女と別れた。
自分の部屋に戻って、僕は腰を下ろす。

夕飯まではまだ早い。テレビも興味がそそるのは放送されてないようなので僕はテレビを消してリモコンをそこらに投げる。

……自由ね。

砕けたお菓子を口の中へ運んで、その甘みと今の自由を重ねるようにして口の中で転がした。

——堪能できてる？

ああ、僕は今堪能しているよ。

そりゃあ一人暮らしだと飯作りは面倒だし美味しい味も見出せずに特に不味くも美味しくも無い炒飯で妥協してたり、朝起こしてくれる人がいなきゃ僕は遅刻確定だ。

けれども何をやるにしても許可なんていない。

勉強するときは家庭教師を何人も引き連れてこられないし自分の自由時間は知らない偉そうな人と顔合わせをして世間話を無理やりされられる事も無い。

今の僕は自由だ。

でも一人だとこの部屋は広すぎて、切なくて……。

音楽を流しても心の中まではどうしてか響いてこない。

どうしてか？ いや、目を逸らさないでよく凝らしてみると心の中に答えがはつきりと刻まれている。

読み上げるのは簡単。

僕は、寂しい。

彪光の笑顔がすぐに恋しくなった。
まったくさ、あの笑顔は卑怯だよ。

式（後書き）

原稿用紙では300枚以内、五章構成を今のところはプロットに沿って執筆してますがもしかしたらもう少し長くなるやも。

どうにも学園物というか、書き物自体が元から苦手でうまくまとめられないのが原因ですねはい。精進精進。。。

くそっ……四時間目の授業が長引いて今日は少しだけ遅めの昼食だ。

その少しだけってというのが命取りで食券自販機の前には長蛇の列が出来ており、空腹の中じゃあ拷問に近い光景。

それでもこここの料理は美味しいので我慢我慢。

腹の虫は文句という名の空腹音を鳴らしているがだからといって長蛇の列が解消されるわけもなく。

そんな時だ。

「悪いな、急いでてよ」

所謂横入りってやつ。

一人なら文句を言ったところだけど相手は二人、芽生えた敵意が消沈していく自分に情けなさを感じつつ小さく溜息。

「待てよ」

すると後方から渋い声がした後に手が伸びて二人の男子生徒の裏襟が掴まれる。

そのまま横に投げられて男子生徒は列から弾かれ、僕の前は空気が生じた。

「お、おい！ 何だよ」

僕じゃないよ、本当だよ。

僕の後ろに並んでた人だと思っからそんな敵意で固めた視線を向けるのは止めて欲しいな。

「横入りはよくねえ」

正論である。

僕の後ろにいる人はとってもいい人と認識して振り返るとそこには、

「服部……君？」

クラスメイトの服部新蔵がいた。

改めてみると背が高い。そのために外見からして彼の威圧感と存在感は鈍感な奴でも掴み取れるね。

当然、横入りした二人の男子生徒は青ざめて危機的状況すら感じて後ずさり。

「わ、悪かったよ……」

一人が代表して謝罪、逃げるように立ち去る背中を見て僕は少しだけ罪悪感に心をつつかれた。

「ありがとう、服部君」

「別に……」

視線を逸らしたのはちょっとした照れなのか、そうだとしたら外見と中身が一致なくてこちらから接したくなる。

よくあるのはそう……漫画とかで不良が毎日喧嘩三昧なのに雨降りの中、ヒロインがその不良を見かけると捨て猫に餌をやっている胸がきゅんとするような感じ。

流石に胸はきゅんとしなかったが、彼に対する外見によって構成された印象は軽く薄まった。

僕はカレーを注文して、料理が出来ても直ぐには運ばず彼を待つ。ちなみに服部君が注文したのは牛丼、漢らしさ溢れるね。

彼の向かい側に座り、僕はカレーを一口。

いやあ、このカレーも絶品だ。

僕は中辛を選んだのだけれどもほどよいピリ辛さとコクのある味が口の中で広がって頬っぺたが落っこちるってやつ。

そんでもって一口を終えた僕は服部君を見て、

「この料理って美味しいよね」

以前とは違って話しかけるに勇氣は必要無く、言葉はすんなりと出てくる。

喉に潤滑油でも塗ったかのようでまだまだ言葉を外へ放ちたい気分だ。

「ああ、確かにな」

言葉自体、彼は長くは言わず短く終える。

それが彼の喋り方なのだろう。

「服部君は部活とか入ってるの？」

「――蔵でいい」

「え？」

ぼそつと一言小声で呟いたので少々騒がしくもある食堂では聞き取りづらいが、彼は頬を指で掻きながら再び口を開いた。

「新蔵でいい、君もいらない」

「あ、うん……し、新蔵」

彼との親しみゲージなる距離を詰める事大幅一歩。

「部活は特に入ってない」

「そうなんだ。入る予定とかは？ 運動神経良さそうだしさ」

「部活はしないつもりだ。バイトする予定だから」

ふうん、勿体無いなあ。

彼ならバスケット部なんか特に欲しい人材じゃないかな。

身長も然り期待できる体力も然り。

「珍しい面子ね」

するとそこへ柳生さんが通りかかった。

いつもは髪を束ねてはいないが今日は頭の左右に髪だんご一つずつ。

彼女の整った顔立ちもあってどんな髪型でも容姿に優劣が生じない。

彼女は当然のように僕の隣へ着席。

未だに会話という会話もした事は無く彼女がどういった性格だとかはまったく知らないが、この機会に彼女を知るのもいいかもしれない。

まずは彼女の昼食を、と横目で覗いてみるとシチューのようだ。着席してシチューに手を伸ばすかと思いきや、彼女の視線はシチューではなく新蔵に向けられていた。

下から上へ、舐め回すように見て、

「前にあんたにガンつけてた不良じゃなかったっけ」

唐突かつ直球な言葉を豪快に投げ込んだ。

僕がキャッチャーだとしたらその配球は絶対にさせなかったよ。記憶を思い返すこと一週間前かな。

ガンつけ……まあ意味深な視線を投げ掛けてはきてたけど。

「あれは……いいなあ、って思っ、だな」

「「いい？」」

柳生さんと言葉が重なった。

「ノート借りて、会話してた、のが……よ」

「あんた可愛い、なかなか可愛い、すっごく可愛い」

「可愛い……？」

訝しげに彼は柳生さんを見る。

可愛いに関しては僕も同意。

あれはおそらく数秒はあったと思われる間だった。

柳生さんからノートを借りて写し終って返した後の話だったな。

彼は僕をじっと見て静止、それでもって特に何かをする事も無くそのまま教室へ出て行ったが、何気にその時の僕は心臓の鼓動が激しくてちよつとした恐怖を抱いていたね。

「北の鬼とか言われてたのに」

北の鬼？

新蔵のあだ名とかそういうのだろうか、随分と迫力があるが。

「それは勝手に周りが呼んでるだけでそう呼ばれるのは好きじゃない」

「てかヤクザとやりあったのは本当？」

「ヤクザとは流石に……」

「じゃあ他校の番長を倒して回ったってのは？」

随分と貪欲さでも抱いてたかのように君は聞きますな。

「あっちから来たから正当防衛を行ったのは何回か」

かなり苦労しているようで、可哀想にすら思えてくる。

きつと大柄な体躯と強面を利用して彼に噂を貼り付けて面白がっていた輩がいたに違いない。

よくそんな環境に置かれて無事に生きていけたね、僕なら病院で看護婦を見て平和だと呟いてると思う。

「そっかあ。ならこっくりさんと対決したとかつてのも誰かが面白半分で広めただけね」

「こっくりさん？」

今度は新蔵と言葉が重なる。

「知らないの？ 知らないの？ …… 本当に知らないの？」

新蔵は微笑しつつ口を開いた。

「対決って、こっくりさんはそういうもんなのか？ あの幽霊みたいな…… だろ？」

やや呆れているような微笑に見られるが無理も無い。

大抵の人がこっくりさんと聞けば先ずひらがながびっしりとあいうえお順で書かれた紙の上に十円玉を置いて儀式的なものを行うのを想像する。

「違う違う。前から噂になってるのがあるの。こっくりさんって呼ばれてる奴がいてお願いをすると何でも一つだけ叶えてくれるけど、その代わりこっくりさんからいつかお願いをされたら絶対に叶えなきゃ駄目らしいわよ」

「ふうん」

「へえ」

僕と新蔵は特に興味が沸くわけでもなくその話を信じたわけでもなくとりあえず今の話はきちんと聞いていたよと言わんばかりの気の抜けた返事を返す。

「ふん、信じなくてもいいけどね！」

ちよつと不貞腐れた様子。

こうして話してみると柳生さんて結構喋る人だ。

最初は一言のみの会話で、会話を終えたとすぐ帰っちゃうし、ここの一週間は会話という会話もしてない。

僕が彪光に振り回されてよく考え事をしたのもあるけどね。

これから少しずつ会話に挑戦してみよう、そんな目標を自分でも

忘れてた。

けれどもこれからの昼食は特に確証なんて無いけれどもこの面子で昼食を共にするのが当たり前になりそうな気がする。

そうして三人で会話しながら昼食を終えて午後の授業。

そういえば彪光はいつも誰と昼食を共にしてるのかな、とか考えながらの授業は右手に持つシャープペンシルが中々働かず、教師の発する説明は眠気を誘う呪文のように聞こえてくる。

眠っちゃおうよここは耐えろとの境界線をなんとか僕は耐えろのほうへ踏みとどまって午後の授業は何とか終了。

アンナも最近は授業をきちんと受けているようだし、僕も居眠りぐらいには耐えないとね。

「お兄様、イキマしよう」

振り向かずとも声で誰かは把握できる、声っていうよりも喋り方のほうがすぐ把握できるかも。

今度はお兄様かよ……。

前までは兄貴って呼んでたのに、とりあえず呼び方は統一してほしいものだ。

どこからそんな呼び方の知識を得たのかは知らないが、彼女にはきちんとした日本の文化から学ばせる必要があるね。

というわけで廊下を出て直ぐに僕は腕を掴まれて連れ出されるといつか拉致というか、まあそんな感じでサークルへ。

肆

連れ出される時に一度溜息を、無事に隠し部屋へ着いた時にもう一度溜息。

モニタを見つめる音々子さんと彪光は不敵な笑みを浮かべた面構えをしており、僕に気づいた彪光は手招き。

いつも通りの彪光で、いつも通りすぎて僕は肩を落とした。

恐る恐る僕は彪光の傍へ寄ると、彼女は一枚の手紙——おそらく目安箱に入れられた投書を手にしていた。

「早速一人投書してたの」

「それでどうして君がそれを持つてるの？」

「盗んだからよ？ 当然でしょ？」

当然の基準が少々ずれてるよ。

基準を直すには君の頭にプラスドライバーかマイナスドライバーのどちらを使つて螺子を回せばいいのか教えてくれればやってあげる。

「投書は公認サークルではなく園芸部のもの。内容は園芸部の顧問がつけていた指輪が園芸部の管理する花壇のどこかに落としたらしくて見つからないとか、部員も少ないし手伝つて欲しいだって」

「ちなみに園芸部は元はサークルだったのですが毎年敷地内や中庭、屋上などの花々等を管理していて学校への貢献が認められて部として認められたところです」

なるほど、そういう制度もあるのね。

まあ、このサークルは部になんかならないだろうが。

「ふうん、それで指輪は僕らで探すの？」

彪光の目的は生徒会の仕事を減らす事、だったはず。

「それもあるけど、ちょっと妨害しましょ」

他には生徒会への妨害もあつたけどこれは忘れたままでありたかった。

用意されているのはスコップ二つと小さめのビニールシートがいくつか。

目の前へ並べてきて彪光は僕へ視線を投げ掛けてくるが目を合わせまいと部屋の隅へ僕は視線を放り出した。

がしかし、両頬を掴まれて強引に顔を彪光は自分のほうへと向けさせてくる。

「こつち見なさい」

燃え上がるような双眸、僕は目が合うやおとなしく首を上下に動かして従順の態度を示した。

「アンナ、穴掘りするデ」

スコップを自ら持つアンナ。

ほらあんたも持ちなよ、と顎で支持してくる彪光に僕はしょんぼりと本日二度目の肩を落としてスコップを持った。

「園芸部は現在部員五人、昼休みは屋上に置いてある花々を管理しているので花壇には来ないです。それに監視カメラでも見てますから大丈夫ですよ、花壇は見えづらい場所にありますが十分によれます」

やれます？ 何をやるっていうのか説明してほしいな。

「じゃあ落とし穴作るわよ。時間もまだあるし、アンナがいるなら大丈夫でしょ」

「ガンバるね！」

僕もガンバるね！ とはいかないよ。

むしろ溜息という返事を送るってやる。

園芸部の管理している花壇はここから結構近く、いつの間にか用意した無線機を手渡されて僕らは彪光の指示の元で行動した。

『そのまま直進、人は無し』

見つかったらどう言い訳しよう、移動中は上手い言い訳の仕方は無いかと考えていたり。

『あ！ どこかに隠れて！』

「ちょ、ちよっともう！」

文句を言うよりも隠れるほうが先。

僕はアンナを引っ張って茂みへ飛び込んだ。

持っているスコップが何気に重くて動きにくいし目立つし、落としたら音も響きやすいわでこいつを持ってて良い事などひとつもない。

『気のせいだったわ、あはは』

あははじゃないもう。

気を取り直して僕は茂みから重い足取りで出てきて再び花壇を目指した。

昼休みにわざわざ学校裏の花壇などに用がある生徒なんているわけも無く、辺りには倉庫なども建てられていて意外と死角だらけ。

彪光が監視カメラで見張ってるし気楽に穴を掘れるっていうやつだ。

気楽に穴を掘るのも自分でどうかと思うけどね。

何か植えられているのなら僕は彪光の命令を無視して帰ろうかと思っただけと特に植えられているものは無く、三つの花壇はこげ茶色だけを強調していた。

さわり心地は良く、中々良質の土なのだろうと土に詳しくも無いがそう予想してみる。

『今は良い土を置いてるだけらしいから遠慮せずにやっちゃって。指輪も探しておいてね』

という事であたりを注意してみて、手で触って指輪が無いと確認してから掘る。

スコップがまるで溶けるように土の中へ入っていき、僕とアンナは掘って掘っての繰り返し。

さほど時間は掛からず良い汗を掻いたなと空を仰ぐ事数回。

僕が昼休み中に掘れた穴は二つ。

アンナが掘れた穴は五つ。

僕は一つの花壇に二個ほど掘って終わり、アンナは僕を置いてけぼりにしてどんな他の花壇で落とし穴を掘ってく始末だ。

圧倒的な身体能力の差を思い知らされる結果に、僕も鍛えようかなと考えてしまう。

その華奢に見える体のどこに筋肉がついているのかを少々調べたいね、レントゲンでも撮れば骨は実は鉄でしたとかいう結果になったりして。そりゃないか。

『近くに園芸部のプレハブ小屋があるから水道とホースもあるはずよ。それで落とし穴に水を流し込んで』

落とし穴に落ちた人にはとりあえず今からごめんなさいと心の中で言っておく。

そう言いつつ彪光に逆らうのも後が怖いので水を流し込むわけなのだけれど。

それからビニールシートを落とし穴に張って上から土を被せれば落とし穴は見事に設置された。誰にもわからないように凹凸も無くして完成。

いやあ、我ながらいい仕事をしたと思う。

この落とし穴、何気に深いから落ちたらひとたまりも無いだろう。まあ……素直に喜べないが。

昼休み中に目安箱の中身を回収するらしく、彪光はそれまでにきちんと投書は元に戻していた。

それから残る昼休み中に立候補者達で話し合って今日の活動を決めるんだとか。

彪光が投書を戻した目安箱は三年立候補者が担当、そして目安箱には園芸部の投書以外は無かったという事は放課後、確実に立候補者は花壇へ足を運ぶ。

全ての授業が終わり、放課後なので生徒は帰宅せよと言わんばかりの予鈴は僕らにとってお楽しみみの開催花火。

おっと、一つ訂正すべきは僕らではなく、彼女らのほうだったね。モニタを凝視してにやにやしている三人の背中を見て僕は溜息一

っ。

「ここ最近、よく溜息をつくのは明らかに彼女達が原因だ。」

「結局指輪は見つからなかったけどいいのかい？」

「気にしなくていいわ、園芸部のために指輪を探してもそれほど利害は無いもの」

それもそうだけど、園芸部が顧問のために折角投書までしたのに僕らは指輪も見つけられず、しかも落とし穴を仕掛けたりでもはや生徒会の仕事を減らすというよりも妨害で目的が締め固められてる気がする。

それも恨みからきているような、ね。

「これじゃあ園芸部の投書を利用した復讐じゃないの？　と言いたいけれども言ったら言ったで怖いので止めておく。」

「そろそろかしら」

「あやみちゅー、楽しミねー！」

「わくわくしますねこれ」

彪光は扇子を開いてくくくといった妙な笑い方を溢し始めた。

それくらいにこれから起きる悲劇を楽しみにしているようで、僕は罪悪感に心がさつきからつつかれていた。

「でもこんな売名活動も出来ないような場所に誰か来るんですかね？　補助役員だけ送るのも考えられるのでは？」

「そうね……大いに考えられるけど、今日の投書は一つだけだし誰か必死な立候補者が園芸部の人数分の票欲しさにくるかも」

まあそういう場合も考えられるね。

「人がキタねー」

アンナの言葉で僕はモニタが気になってちょっと寄ってみたり。

「あら、結構な人数ね」

いや、僕の仕掛けた落とし穴がどうなったとか、そういうんじゃないんだよ？　僕はただ誰かが怪我したりしたら嫌だなあかと思っただけで、それなら見なきゃいいじゃんっていう話になると思うけど、こう眼に焼き付けて自分を戒める、とかそういう、うん……。

「キタキタキタキタキタ！ あれよあれ、御厨夏江！ ターゲットはあいつ！」

「そのまま前進ネー」

どうやら生徒会長候補の御厨夏江が来たようで、彪光の高揚っぷりから恨みが相当沈殿していたのではないだろうか。

極道の子が一年の生徒会長選挙に立候補するのは止める、そんな言われ方は流石に僕もどうかとは思うがね。

「よし、そのまま行きなさい！ 五臓六腑をぶちまけちゃえ！」

流石に落とし穴で五臓六腑はぶちまけられないよ、嫌な想像させないでくれ。

御厨夏江はとりあえず花壇に入って、園芸部と話し合ったりしている様子。

人数の割り振りでもしているのか、彼女が右の花壇を指差せば生徒達の何人かは右へ、彼女が左の花壇を指差せばまた然り。

リーダーシップを発揮しているのはモニタ越しでも解る。

生徒らを指揮する立場というものに慣れてもいる様子であるし、園芸部の顧問の指輪探しなんて投票者達には見えない場所での活動にも関わらずきちんと請け負って全力で行動するその姿には一票を入れたくなる。

そういえば彼女が今立っている花壇は僕が二個ほど落とし穴を掘ったような……。

すると彼女は、

「きゃ——」

声を上げて落とし穴にはまり、

「あわ、わ……！」

そのまま前へ倒れこんで、もう一つの落とし穴に頭から突っ込んだ。

彼女の綺麗な顔が泥の中へ飛び込む映像つてのは僕にとって今年一番の悲劇でしか無い。

「あははははははは！ 見て、見て、あはっ！ ねえ！ ちよっ、

ちよつと！ あはっは！」

そう言いながら僕の肩を何度も何度も叩く彪光と続いて笑うアンナと音々子さん。

そして全身の血の気が引いていくのを感じる僕は、言葉を失った。

「泥まみれよあはははははは！ よくやったわ！ あは、く、くる…」

…苦しい！ あはははははは！」

僕が出来る事、いいやすべき事は神様に懺悔して清き一票を御厨夏江さんに送る事。

もちろん、彪光に知られたら大変な事になるが。

肆（後書き）

1 - 1とか第一章の1なのは解っているのわざわざ1 - 1という表記は必要あるのだろうか、そんな事を考えた結果、そのまま1でいいかなと思ったけど、寂しいから漢数字にしてみました。特に意味を込めたわけでもなく、何か良いサブタイトルつけられるほどのセンスも無いのでこれでこれから表記していきます。サブタイトルつて話の内容についてやサブタイトル事態に深い意味を込めたりと単純なようで奥が深いものだと思っていますゆえ、未熟な私は漢数字で誤魔化し、げふんげふんふう……。。

伍

園芸部の花壇に落とし穴だつてよ。

生徒会長候補の誰かが狙われてるって話だ。

他の候補者達の争いか？

なんていう噂は朝のニュースで流れた芸能人の電撃結婚や九死に一生の体験をした人とか大胆な強盗団が大胆に強盗して大胆に捕まったとかそういう話を全て蹴り飛ばして皆の興味を独占していた。

「聞いた？ 聞いたよね？」

隣にも園芸部の花壇について話したがっている奴が一人。

「聞いてない知らない解らないよ」

机に突っ伏して現実逃避を試みたいと願う朝。

しかしながらどう足掻いても鼓膜に届くクラスメイトの声が現実を突きつけてくる。

落とし穴、落とし穴、落とし穴、もはやその言葉が盛り上がる話題のための重要な単語と化しているのだ。

「しんぞーは聞いたよね？」

「聞いた」

「この学校も怖いわねえ。古典的だけどまさかの落とし穴よ？ 顔面ダイブよ？」

罪悪感が僕の想像では棘から槍になつてる。

そんでもって僕の心を何度もつついてくるんだけどそろそろ僕は心臓発作とか起こしてしまわないか不安だ。

そうでなくても心労で倒れるかも。

むしろもう倒れて病院に運ばれて看護婦さんを見て眼福眼福とか言っちゃって一日を過ごしたい。

本来ならばこうも広まるはずの無い話だった。

生徒会の人達が言いふらすはずも無いのだから、僕は心の中で昨日を振り返って微笑するくらいで終えるはずだったのに、どうしてこうも話が広まったかという、だ。

学校の校門に写真が貼られていたらしい。その写真は御厨夏江さんが落とし穴にはまって、彼女の言う顔面ダイブってやつをして泥まみれになった瞬間が写しだされていたとか。

おそらく音々子さんと彪光の仕業。

写真の量も恐ろしくあつたらしく回収が間に合わずに多数の生徒が持ち出してしまったらしい。

その結果がこれだ。

一度話題は止んで僕は安心するが、すぐに「御厨夏江の顔面ダイブ」「落とし穴」「陰謀」と先ほどよりも盛り上がってそういう言葉が飛び交っており、僕の鼓膜にも届くと同時に帰りたい衝動に駆られる。

今日はもう隠し部屋へ行かずに帰ろう。

そんな決意を胸に放課後、僕は校舎を出るべく急ぎ足。

アンナには購買で買っておいたお菓子を与えたら夢中で食べていたのでその間に逃げるのも成功。

下駄箱へ靴を投げ入れたところでポケットに振動を感じて僕は携帯電話が鳴っている事に気がついてそれを取った。

画面には知らない電話番号。

もしかしたら登録のし忘れかもしれないけど、誰だろう？

僕は電話に出ると、

『どこに行こうとしてるの？』

電話に出た事を後悔した。

その声は誰かなど脳内を掻き回して探るまでも無く、彪光の姿が刹那に浮かび上がった。

「あー……いや、その……」

正直、どう返事をしたらいいのか解らない。

口籠るしかなく、その間に言い訳を考えるが時間稼ぎにすらなら

ず冷や汗が頬をなぞった。

『この番号は私の名前で登録してね、それと早く来なさい』

僕は投げ込んだ靴を回収して踵を返した。

それが今、僕の行う行動として最も正しいものだと思ったからである。

とぼとぼ、そんな効果音を背中に貼り付けてくれるとさぞ似合うのではないかな。

気分じゃない、言い訳するならそう言うべきだったかともか考えるがそう言ったところで彼女の台詞は変わりなかったと思う。

隠し部屋へ行くとアンナ以外はいるようで、アンナはおそらく僕が与えたお菓子を頬張り中。

昨日の件もあって彪光は上機嫌だろうねと顔を覗いてみたが予想とは裏腹に神妙な面持ちでいた。

モニタには園芸部のプレハブ小屋に入る男子生徒が一人。

カメラの角度がやや上からだが何処にどうやって設置しているのか気になる。

男子生徒は些かこう、園芸部らしからぬというか園芸部には似合わない容姿。

でもどこかで見た事があるな。さすがに上からの視線なんてそうそう無いのもう少し角度を緩やかにしてもらえばいいのだけだ。

「監視カメラに映ってたのよ、もちろんこいつは園芸部じゃないわ」

「一年七組の服部新蔵、街の不良グループとも係わり合いがあります。前々からこの街では評判も悪かったですし」

「新蔵……？ 本当に新蔵なの？」

まさか、そんなわけあるはずが無い。

ま、まあよく見れば似てるには似てるけど気のせいだと思うよ。

「知り合いですか？ 他の角度から画像も撮っておきました、見ます？」

手渡された写真には、確かに新蔵が映っていた。

「よく調べたわメス豚」

閉じた扇子で頬をぐりぐりとして、音々子さんは嬉しそうにしているがそれよりも新蔵が園芸部に来ているのは何故だろう。

部活にも入るつもりは無いって言っていたし。

「落とし穴のおかげで生徒会は指輪探しも保留にして見つけてはいないけど、元から指輪は無いのかもね」

「……無い？　というと？」

「馬鹿ね阿呆ね馬鹿馬鹿ね」

そこまで言わなくてもいいじゃないか……。

「直接は言えない何かを気づいてほしくて投書した、というのはどう？　誰かに気づいてもらってこの服部新蔵をどうかしようっていう投書だったのかも。それに昨日の件は服部も園芸部にはしばらく来ないでしようし」

弱みを握られて何気ない投書をして生徒会の連中を呼び寄せたかった、とな。

そんなのありえない。

「新蔵がそんな事するはずが無いよ……」

「貴方、新蔵と友達なの？」

ああ、友達だ。

「彼の事を全て知っている親友なの？　好きな食べ物、好きな人、好きな事、好きな音楽、好きなスポーツ、全部答えられるくらいに？」

……どれ一つとして解らない、確かに友達としてはまだ時間が足りないのかもしれない。

「ふん、所詮何も知らないようね」

何も言えなくて悔しいけど、新蔵が園芸部に何かしているとは考えたくも無い。

「これからどうするの……？」

「園芸部に行くわよ。私達が問題を解決して園芸部に恩を売ってやるの」

扇子を開いて彼女は部屋を出る。

僕は彼女の後姿を見て躊躇していた。

もしかしたら、そのもしかしたらという続きが今後僕の中で生まれ始めていた何かを摘んでしまう気がして。

「逃げるの？」

それでも見て見ぬ振りだけはしちやいけない……。

それは解ってる。

「いや……行くよ」

深呼吸を一度してから僕は彼女に続く。

音々子さんは監視カメラで生徒会の動向を連絡してくれるよう部屋で待機。

途中で彪光はアンナを回収してから園芸部へ。

僕が与えたお菓子とは別に何故か色々とパンやらジュースやら増えていて通りかかる生徒が食べ残したり買いすぎたりしたものを与えていたようだ。

これも偏に彼女の純粋さあってこそ。

「お兄様、オカえしー」

アンナはチョコレートを一つ僕にくれたので僕は口の中へ投げ入れて味わった。夕方ってのは小腹も空くしね。

それとチョコを食べると落ち着くと聞いたがそんな事は無く不安しかない。

加えて彪光の奴、何かやらかさなければいいけど妙に高揚してますと言わんばかりの鼻歌が気になる。

それに新蔵。

僕は君が頼りになる良い人だと思ってる、園芸部には何もしてない、何か用があっただけ。そう思いたい、いや——そう信じてる。

園芸部の活動場所へ行くと昨日の件で園芸部の今日の活動は花壇の整地らしく、何人かが花壇に入って土を均したりしていた。

申し訳御座いませんと心の中で頭を下げて謝罪し続けながら僕は彪光の影が如く縮まりながら歩く。

「あの、うちの部に何か？　もしかして入部希望者？」

先駆けて話しかけてきたのはさわやかさを纏わせた青年、土を均していた作業も周りとは違い早く丁寧な感じで言動行動共に部長っぽい貫禄も感じられる。

「貴方、この部長？」

「ああ、そうだよ」

「それじゃあ少し話をしましょう、中に入れてくれる？　いいわよね？」

彪光は了承も得ずプレハブ小屋の中へ。

溜息をつきつつ僕もここにいると園芸部の活動が罪悪感を増幅させるので彪光についていつて中へ。

アンナは何故か園芸部にお菓子を配ったり絡んでいたが放っておくでしょう。

「こんにちわ先生」

中には顧問の先生が一人。

綺麗な女性だ、長い黒髪がさらりとしていてぱっちりとした瞳に潤いのある唇、整った顔立ちはまさに園芸部の花。

園芸部だけに。

今うまい事言ったなあなんて。

それにしても室内は花の香りで充滿していてその香りは嗅いでいても心地が良い。そこらにいくつかある名前は解らないが赤や黄色など鮮やかな色を宿している花々のおかげに違いない。

「橘先生、この人達が話をしたいって言うんで」

ああそうそう。

生徒達でも名前が挙がってたね。美人教師の橘佳代、確か一年の国語を担当している教師だが、担当は五組まで。

七組の僕はむさくるしくも感じる熱血と熱血が結婚して生まれた子のような先生が担当しているからチェンジでって言って交換してほしいくらいだ。

「そうなの。席を外しましょうか？」

「いいえ、先生。貴方にも話があるわ」

彪光は近くにあった椅子を引っ張って座り、部長は律儀に僕の分の椅子を用意してくれたので座り、全員が着席したところで彼女は部長に言う。

「指輪は見つかった？」

「指輪は……その、まだ見つかつてはいないよ」

ふうん、そんな声を鳴らしてにやりとする彪光。

そして橘先生に顔を向けた。

彼女の視線は少し下、橘先生の手を見ているようだ。

「橘先生、指輪は大切なものだったの？」

「え、ええ……そうよ」

「大切なものという事はずっとつけてたのよね？」

「ええ……でも時々お手伝いする時はその、外すようにしてて、ね？ ただたまたまその時外し忘れちゃって、そしたらなくなっちゃったの」

橘先生も顧問であるのだから土も触る、綺麗で細い指も触られた土もさぞ嬉しかろう。

「指輪が無くなってからは？」

「三日、くらいだったかしら」

「それにしては指輪の跡がまったく無いわね」

咄嗟に橘先生は指を隠した。

視線も逸らして軽く唇を噛む。

瞬き二回、それからもう一度唇を噛んだ。

その仕草、僕には嘘がばれたというようにしか思えない。

「最初から指輪なんてしていなかった？」

僕は思わず疑問を言葉にしてしまう。

橘先生は目を逸らしながら、

「し、してたわよ？ いつもお手伝いする時は外してるからかしらね……？」

……苦笑い。

「それでも長年つけてた指輪の跡がすぐに消えるなんてありえないわ」

……それに目も泳いでいる。

立花先生が今頭の中で考えている事はどう言い訳すべきか、ではないだろうか。

「もういいでしょう？ 生徒会に気づいてもらいたいの解るけれど、貴方達が抱えてる問題、服部新蔵も知ってるのよ」

「ど、どうしてそれを……」

「見張られていたのもあるのかしら？ 大袈裟に指輪が無いって話して投書しようと言ってみせれば服部新蔵に聞かれていても問題は無く、投書の内容を知られても問題は無いものね」

橘先生は沈黙。

助けを求める視線は部長へと寄せられたが部長もまた沈黙。

「それに気づいてもらえなくても、服部は生徒会が接触したのならしばらくは距離を置くはず、本当の目的は一時的でも遠のかせる事、かしら？ その他にもこのような動きを見せるぞという姿勢を見せるためのようにも思えるわね、何故そうしたいのかは解らないけれど」

再び部長へ助けを求める視線を送る橘先生だが、部長とはそれほどの信頼関係を築いてるのかな。

「聞いてる？ 橘先生」

「は、はい！？」

声が裏返ってるけど、少し落ち着いたほうがいいんじゃないかな？

「そういえば橘先生には彼氏がいるんじゃないかって噂もあったわよねえ。まだまだ二十代、それに肌も綺麗だし羨ましいわ」

「あは、は……いえ、そんな……」

「例えば、その部長さんと恋愛関係とかになってたら、学校としても生徒教師両方もまづい事になるわね。ああ、例えばの話だけだね。た、と、え、ばの話」

彼女は扇子を閉じて一定のタイミングで手を軽く叩く。

その音が重圧のように、橘先生の鼓膜へ届いているのは間違いない。

震える足がそう教えてくれる。
でも恋愛関係はどうなんだろう、まあ彼女の例え話だから気にしなくていいか。

「た、と、え、ば、の話が続けると服部がそれを知って二人を脅して、二人は長く脅された結果、先ずは投書を投げ込んで生徒会をひきつけて服部がこちらに絡んでいるのを気づいてもらうのを待った」
新蔵がそんな事するはずが無いだろう！　って怒鳴りたかった。
でも先生と部長の様子を見る限り否定はしていないのが、今のところ事実に沿っているという様子。

悔しいけど僕は、只管沈黙して聞くとした。

彪光は立ち上がって橘先生の近くへと歩み寄り、彼女の周りをぐるぐると回りだした。

「大切なのはこちらから生徒会に助けを求めるのではなく、生徒会が気づくという状況を作りたかった。何らかの迷惑行為として生徒会が服部に注意してくればよしってどこかしら」

僕は部長を横目でちらりと見た。

冷や汗を掻いて視線を下へ落としている。

二人の様子は明らかにおかしい、共通した何か、それも彼女が言ったとおり脅されているのだとしたらそれを突き止めた彪光に対するの畏怖ではないか。

「でも兎に角は服部からの接触とここへ来るといふ事だけが一時的でも無くなればよしだったんじゃないの？　時間稼ぎ、ただ何の時間稼ぎ？　気になるわねえ」

彪光は二週目を迎えて橘先生の後ろに立つと足を止めた。

扇子を肩に当てて、

「どんな弱みを握られてるの？　そこで黙ってる部長も、貴方も、私から何もかも説明させるよりも説明してもらえるほうが嬉しいわ」
それでも橘先生は口を開こうとはせず、只管に視線を逸らし続け

た。

「あつそ。なら部員全員集めて暴露という名のお披露目をしましょうか。ええ、そうしましょう。禁断の愛ってタイトルで大胆に」
彼女はすぐさま外へ出ようとした。

もちろん出るつもりなど無いだろう、強引に動かすための引き金といったところだろう。

「ちよ、ちよっと……ま、待って」

ほら、引き金は引かれた。

「何？ 別に参加料は取るつもりは無いから安心して。何なら客はもつと集めてくるわ」

彪光は追い討ちをかけるように携帯電話を取り出して電話を掛けた。

「ま、待ってくれ！」

そこへようやく部長が立ち上がった。

彼女の携帯電話を取って電話を切る。

それに対して彪光は特に文句も言わず、鼻で笑って電話を取り返した。

「利口な彼氏ね」

僕は新蔵を信じたい、でも今から何かが崩れるようで僕は話を聞きたくは無かった。

それでも今は聞くしかないために心が縛られるような気分を抱き、僕は耳を傾ける。

陸

それから部長が説明してくれた。

二人は彪光の言う通り恋愛関係にあり、偶然目撃した服部はそれを知って脅してきたという。

恋愛関係になったのは最近の事、以前から二人は想いあっていたものの教師と生徒という関係がそれを思い止まらせたが部長からとうとう告白して結ばれたとの事だ。

生徒と教師という関係での恋なんて羨ましいがそれは置いて脅しに対しては主に服部の要求はお金。

一度渡したものの、二度三度と続いてこれでは拉致があかないと投書を出したそうだ。

「学校側に知られたら間違いなく大問題、それにお金の要求もあったは大変ね。ここ数日で相当取られたでしょう？」

橘先生は涙を流しながら頷いた。

「でも投書を出しても解決はしてないですよ？ 服部は確かに来ようとはしないでしょうけど」

僕の疑問はここ。

「その……こつ……」

「こ？」

「こつ……こつくりさんに頼もうと思って……」

部長は至って真面目、橘先生も然り。

彪光は扇子を広げて溜息を隠した様子。

溜息……？

いや欠伸か。少々涙目になってるし。

お願いをすると何でも一つだけ叶えてくれるけど、その代わりこつくりさんからいつかお願いをされたら絶対に叶えなきゃ駄目、柳生さんから聞いた説明を僕は復習するように脳内で読み上げた。

「噂にはなってるけどまさかそんなのにすぐるとはねえ。ここらだと確かに有名だけど、本当にいるかは解らないのよ？」

「いる、きつといるさ……。もし見つからなくてもその時は俺がケリをつける……」

部長はどうにも何かをやらかしそうな雰囲気。

心を静めるための時間稼ぎでもあったのかも。

「どうしても誰かもつと力のある、例えば他の先生とかに相談はできないんですか？」

とりあえず聞いてみる。

じゃあ相談しよう、とは絶対にならないだろうけど。

「無理、絶対に無理よ……。警察に駆け込んだって結局学校に連絡がいくじゃない、私の事はどうでもいいわ、でも幸隆君はきつと辛くなる……」

「先生……」

二人の頭の上に氷でも置いてみたくなるくらいに熱々な関係が見て取れる。

お互いの視線が交差して頬を赤らめて、僕はこの場にいるのはちよつと嫌になってきた。

「もしも私達が何とかしたらどうする？」

自信を乗せたその言葉、彪光は不敵な笑みを見せて表情でも自信を表現しての発言は、

「な、なんとか出来るの……？」

大きな希望を与えたがしかし、彪光の思惑通りに事が運んでいるのがどうにも素直に喜べない。

「任せなさい、その代わりこの問題を解決したらそれなりの見返りを求めるけどいいかしら？」

窮地に陥ったところで助けしてくれると言って手を差し伸べられたら誰でもその手を掴むのは必至。

即座に二人は彪光に頭を下げて、僕は溜息をついて外で楽しそうに土を均すアンナを見て癒しを求めた。

アンナ、土を均すのはいいけど調子に乗っちゃ駄目だよ。人一人入れるような穴が出来てるよ、すぐに均そうね。

そうしているうちに彪光は席を立ち、もっここを出る様子。

「大船に乗ったつもりで安心しなさい」

泥舟にならなきやいいけど。

僕は彪光を追いかけないようにして、きちんと頭を下げてから外へ出て行った。

「アンナ、行くわよ」

彪光はこの問題を解決すると断言したけれど、出来れば暴力抜きで解決してもらいたいものだ。

隠し部屋へ戻ると音々子さんは数枚を束ねた書類を彪光に手渡ししていた。

彪光は書類に目を通し、その間僕はアンナから飴を貰って口の中で転がす。苺味つてのは久しぶりに味わうね、美味しいもんだ。

しかし小さい飴はすぐに溶けてしまい、完全に溶けて無くなった頃に彪光は口を開いた。

「先月からこいつ、かなり問題を起こしてるようね。恐喝や喧嘩、それに街の不良グループとも繋がりがああるわ。巧妙にも学校側に知られないようにしてるようね」

「そ、そうなんだ……」

「はい、かなり調べなければ解りませんでした。口封じも行ってますし聞き込みも入念に行わなければなりませんでしたし」

「し、新蔵がそんな事……」

「するわけがない？ 貴方は呪文のようにそう言っていれば本当になる魔法使いかしら？」

何も言えない……。

「知りたくなければ耳を塞ぎなさい、見たくなければ目を閉じなさい、嗅ぎたくなければ鼻を塞ぎなさい」

彪光は僕の頭を扇子で軽く叩いた。

「でも彼は、友達なのよね？」

ああ、そうだ。

これが事実、否定しようにも否定できない事実なのはもう自分でも解ってる。ただ、直視する勇気が無かっただけ。

「どうしたい？」

新蔵をこれ以上悪い方へと進ませるわけにはいかない、たとえお互い友達としての時間は少なくとも、僕は彼を友達だと思っているから。

「……止めたいさ」

「解ってるなら、それでいいわ。さ、今からそいつに会いに行きましよう。今頃街中でまた何かやらかしてるかもしれないし」
でもどうやって？

彪光以外は誰もがそんな疑問を浮かべて口をへの字にしていた。唯一自信ありげな表情をしている彪光は何か探しだせる当てがあるのだろう。

「街を歩いてれば見つかるでしょ」

前言撤回。

見切り発車な奴だな君は。

まあそれでも何かと結局思い通りになってるわけだけど。

そんな事で今日は夕方から街を歩き回る事に。

女子三人が先行し僕は少し後ろを歩いた。

何だか肩を並べるのはちょっと恥ずかしいっていうか、慣れてないっていうか。

そうこうしているうちに歩く事一時間、空色を窺うに夕方というよりも夕暮れ。

「情報によるとここらでよく悪事を働いてるらしいのですが……」
大通りの近くと言えば近く、でもシャッター街に成り下がりがつつある場所で年々大通りの勢いに押されており今では通学路としての利用のほうが多い場所。

脇道も多いし街灯は点灯していないのもちらほら、所謂力ツアゲとかにはいい場所が探せば続々と出てきそうだ。

「ん……あれは？」

歩き回っても仕方が無いので見通しの良い場所で張りこむ事にしておよそ一時間後。

遠くのほうで脇道へ入っていく人影一人。

ほんの少ししか見えなかったけど、どこか見覚えはあった。

後をつけて行くとするがいやはや、人数が多いと物陰から覗き見るのも串団子みたいな感じ。

ビルとビルの間に伸びる脇道は流石に光も入らず薄暗い。

その奥で新蔵らしき人影があるが、もう一つ他に人影があった。

何かを手渡していてここからでは言葉も拾えず、彪光に指示を仰ごうとしたが彼女は既に脇道へ入っていった。

冷静でいた僕と音々子さんはお互いに顔を見合してどうしようかと視線で相談。

アンナは悩む間も無く彪光の後ろをついて行ってしまった。

「御機嫌よう、服部新蔵君」

まだ新蔵だとは解らないが彼女は既にそう決め付けているようだ。

「何だお前……」

その声を聞いて僕は新蔵と判断して、物影から出て脇道に入った。彪光の後ろにつくと新蔵は後ずさりして動揺した様子を見せる。

彼の隣にいる人は誰かは解らないが、新蔵が彼の肩を突き飛ばすように押すと逃げるようにしてその場を離れていった。

「新蔵……」

僕は新蔵へ歩み寄ろうとしたが、彪光がそれを止める。

「アンナ、行きなさい」

アンナは腰につけていたポシェットからグローブを取り出して装着。

飛び掛るようにして彼女は先ず右ストレート。

新蔵はそれを寸前で避けて反撃するが、拳を拳で防ぐアンナ。グローブならではの防御だ。

脇道という行動が大幅に制限され、且つそこらにはゴミ箱やら障

害物の多い場所ではお互い攻防にも支障が出る。

だからこそ蹴りなどはなるべく控えた拳のみの戦闘が目立った。

「中々やるわねあいつ」

北の鬼、そう言われるだけの強さを僕は目の当たりにしている。

お互いの拳は当たらず、その度にアンナの笑みは増していく。

ようやくアンナの拳が彼の腹部に一発めりこむが、同時にアンナの頬へ一発の反撃。

効いていないようだ。

それに対してアンナは口元から出血。

唾を吐くと赤く染まっており、口内も切ったようだ。

「新蔵！ …… もう、止めようよ」

声を出さずにはいられなかった。

次にまたお互いが動き始めたら今よりも激しい戦闘になるからだ。

「…… 止める？ 今こいつとやつてる喧嘩をか？」

「そうじゃない…… その、園芸部の事、とか…… さ」

新蔵はそれから何も言わなくなった。

小さな溜息だけが聞こえ、僕は心の中で漂っていた『脅してたりしているのは本当は新蔵じゃないのかも』とかそういった希望がふつと息をかけて消える蠟燭のように消失するのを感じた。

アンナは再び動き出し、お互いの攻防が再開される。

「随分とお金を必要としてるのね」

彪光は彼が聞いているかすら解らない激しい状況下で喋り始める。
「中学の頃は来る敵のみ、それなのに先月から貴方は突然暴虐に目覚めたかのように喧嘩力ツアゲ恐喝、どうしたのかしらねえ？」

変化が起き始めていた。

攻め続けるはアンナ。

手数も減って防戦一方は新蔵。

先ほどの拮抗した状況とは明らかに違う変化。

疲れや負傷が理由では無く、彼が攻めるのを躊躇っている気がする。

「仁義ある不良、北の鬼だっけ。そんなの確かに噂でしかないわね。本当は金に目が眩んだ汚いクズだもの」

「金が欲しくて何が悪い！」

新蔵の反撃、アンナは防御するものの、彼の拳はアンナの腕を弾いて顔面に。

寸前で顔を反らして避けようとするものの頬に打撃、アンナは三歩ほど後退して膝をつきそうになるが何とか体勢維持。

「あやつ、ツヨイよ」

喧嘩慣れしているに加えて身体能力とそれを活用できる体躯、更に腕の長さでもアンナは不利。

しかしそれ以外に彼の強さの源は何らかの執念があるように感じられる。

「僕は君に助けられた時や話してる時、いい人だっと思った。今でもそう信じてる……」

「俺を見るよ、どう見える？　俺は鏡で自分を見ると金のためなら何でもする奴にしか見えねえ」

僕にはまだ友達としか見えない、優しい友達、心強い友達、ちょっとお茶目なところもある友達、それが彼だ。

「妹さん、元気？」

すると彪光は僕らの会話に割り込んだ。

「……何だって？」

「妹さん、いるでしょう？　元気にしてるかしら？　あ、でも私は貴方の妹さんとは面識も無いけれどね」

彪光の傍には音々子さんがいて、おそらく妹さんがいるという情報に彼女が教えたものと把握。

音々子さんが書類を指差して、それを目で追って読む彪光。

何だか秘書と社長みたいな感じ。

「何が言いたい……」

「入院してるようね、今からお見舞いに行こうと思うのだけれど兄さんは元気？　とか聞かれたらどう答えたらいいかしら？　教えて

くれない？」

新蔵は動きを止めた。

その隙をついたアンナの拳は、新蔵の顎をとらえる。

崩れるように膝について倒れる彼の意識は彼方へ飛んだようだ。

漆

彼を運ぶのは彼を倒したアンナでは無く僕の役目なのは少々納得
いかないが、ゼーはーゼーはーと運動不足を強調するような呼吸で
運ぶ事数十分。

通りかかった公園のベンチへ彼を下ろし、僕は地面にへたり込
んだ。

本格的に鍛えるべきかも、とか考えつつもそれから彼が目覚
めるまでじっと待っていた。

「軽蔑したか……？」

僕はそろそろお腹が減ったけど皆どうするんだろうとか、先ず僕
らを置いてどこにいったんだろうとか考えていた時、新蔵は目が覚
めたらしく僕へ言葉を投げ掛けた。

「全然。何か理由があるんでしょ？ 僕はそう信じてるし、たとえ
お互い知り合って間もなくとも僕には新蔵って奴は悪い奴っていう
印象には絶対に入らないよ。今も、これからも」

「悪人っていうのはな、俺みたいな奴を言うんだ。言い訳もしない
し金が欲しかっただけだったんだからな」

「嘘だ」

「本当だ」

「嘘だよ！」

声が自然と荒々しく大きくなってしまった。

「……金が欲しい、そのためなら何だってする。そういう奴は何だ
っていうんだ？ まさか良い奴とは言わないよな？」

「大切な、そう……妹のためだっていうんなら僕はすんなりとそう
だねとは言えない」

彪光から既に資料は見させてもらった。

妹の入院、それと連動するように新蔵の悪事も目立ち始めており、
妹のために金を集めているのは調べずとも明らかだ。

僕には彼の行為も素直に悪事だとも言いづらい。

例えば娘を人質に身代金を要求されて銀行強盗をしろと言われて銀行強盗をした父親は悪い事をした悪い奴と言えるのだろうか。

極端な例えではあるけど。

「今の世の中な、金があれば命が買えるんだぜ」

「……うん、そういう世の中だね」

否定はしない。

どれほど自分の理想像を世の中に押し付けようとも現状はそういうものだ。

三秒に一人は死んでも言われてるし、そのような環境は結局金があれば解決できる。そりゃあ寄付とか色々あるけど結局元を辿れば金しかない。

「妹さんの名前、聞いていい？」

「今日子」

「今日子ちゃん、ね」

頭の中で可愛い妹を想像しようとするが失礼ながら、新蔵の顔を見てからでは想像に差支えが生じる。

別に新蔵の顔が悪いんじゃないからそこは許して欲しいがこう、遺伝子を考えると似たような顔付き、それならば……とか歪曲した想像になってしまう。

きつと可愛い妹さんであろうが。

「四回、それが今まで大手術をした回数だ。まだ中学生になったばかりだというのによ、元気になったと思っただけ入院でな」

一つずつ重石を乗せられたかのように新蔵の声が沈んでいく。

「今回はかりは助かるかすら解らないし手術費用も高くてよ。どうにもなんねえししかも手術拒否の話も出てる」

予想以上に状況は悪いようだ。

「でも絶対に手術させる、そのためには金が必要なんだ」

「今のやり方じゃあ限界があるだろ新蔵、冷静になってくれ。周りが見えてなさ過ぎるよ」

「解ってるさ、それに金は大金でなくてもいい。それなりの金額だけでも効果がある」

効果がある？

妙な言い方だ。

「効果、っていうのは？」

「ああ……手術を拒否するって母さんが言い出したんだ」

「まさか……」

娘のための手術なのに金を出し渋っているというのか。

そうだとしたら人として見過ごせない。

「小さい頃に親が離婚しててよ。好きな人が出来たからっつー理由で離婚とか笑えるよな。ついでに妹も連れて行くときたもんだ。親父は情けねえ奴だから何も言えねえし、俺はついていかなかった」

僕の勝手な推測だけど新蔵は親父さんのためについていかなかったんじゃないかな。

「今日子とは離れ離れになっってからは何度も会ってたけど、しばらくして入院の話とか聞いてな。それから病院へ会いに行くほうが多くなったんだ」

新蔵はゆつくりと上体を起こした。

体勢を変えてベンチへ座りなおし、空いた場所に僕も座る。

地面に座り続けるのも石がお尻にめり込んで座り心地は中々最悪だったからね。

「母さんは人としても褒められたもんじゃねえ、まあ俺もその性格を受け継いだわけだけだな」

「新蔵のお母さんが……手術を拒否してるなんて……」

彼は静かに再び口を開いた。

「だからせめて手術させるためにも俺が金を集めて説得したかったんだ」

「馬鹿」

「馬鹿だよな」

本当に馬鹿な奴、そのために汚名に汚名を塗りたくるような行為

をして。

でも、良い奴だ。

「もしかしたら手術で死ぬかもしれないねえ、それに手術が成功したとしても長くは生きられないかもしれないねえ。でもよ、だったら手術しないほうがいいじゃないかって言う事にはなんねえよ」

確かにそうだ。

僕は全てにおいて彼の言い分には肯定の意思を示すべく頷いた。

ようやく帰ってきた彪光「一行様、彪光は僕らを確認すると扇子を開いて歩み寄ってくる。」

彼女に相談してみようかな。

僕もそれなりにお金は用意できるし、彼女も一緒に協力してくれないものかな。

「なあ彪光……」

「何？ 金の話ならしないでよ」

駄目か……。

僕が彪光に頼ろうとした事もお見通しと言わんばかりの眼光。

彼女は新蔵の前に立ち、彼を見下ろした。

「今まで金を巻き上げてきた人達へお金を返す事と謝罪、特に園芸部に。それと私達に言われてと強調する事。これが私の望み」

「……わかったよ、そうする」

断れば警察なり何なり彼の行く先は光が灯らない場所、だから彼の選択は一つしかない。

新蔵は全てを諦めたかのように、肩を落として溜息混じりの言葉だった。

諦めるしかない、そういう未来が彼の心の中に住み着き始めている。

どうにかできないかと僕は彪光に視線を送って、彼を助けたいと目で訴えた。

彪光と目が合うも、彪光は僕の頬に扇子をめりこませる始末。地味に痛い。

「妹さんは服部今日子、いえ……今は犬飼今日子だったかしら？」

「ああ、そうだが……？」

「手術、入院費の免除とこれから行つ大手術には腕の良い医者担当するって話よ。良かったわね、手術が成功してその医者の下で治療を受ければきっと長生きできるわ」

「ほ……本当か？」

「本当なの？」

唐突、唐突すぎる最高の話だ。

彪光はゆつくりと頷き、柔らかい笑みを見せた。

それは不敵なものでも不吉なものでもない僕の好きな彼女の笑みだ。

「新蔵、良かったじゃないか！」

「ああ……ああ！」

「犬飼家はあの子が生活するには辛い環境だし上手くいけば今日子の親権と養育権も父親に移せるかもね」

隣に立つ音々子はいくつかの書類を新蔵に手渡した。

「それを持って今日は帰っていいわ。あと園芸部へお金を返すのと謝罪も忘れずにね。全て終わって落ち着いたら私のところに来なさい」

「シンゾー、またヤロウね！」

新蔵は何度も頭を下げて、涙していた。

駆け足で帰る彼の背中を見送って、彪光と僕は肩を並べて口を開いた。

「ありがとう」

「何が？」

白々しい奴。

「君が手を回してくれなければいきなり手術と入院費が免除とかされないだろう？ それに医者まで紹介してくれるなんてさ」

「ふん、院長が良い奴だったんじゃないの？ 私は知らないわ。あーもう暗くなっちゃったし近くまで迎え寄こしてもらおう」と

扇子で扇ぎつつ彼女は急ぎ足で歩き始め、

「そういう君はなんていうかすごく可愛くて好きだよ」

僕もついていくように歩き、

「ば、ば……馬鹿！」

頬を拳で殴られた。

「痛い！ 痛いよすごく！」

「あやみちゅやるネ！」

とアンナが、

「羨ましい……」

と音々子さんが言う。

僕の心配をしてくれる人は何処？

まあ……別にいいけど、こうして今日一日を終えて振り返ると僕らのやっている事は正攻法とは言えないし邪道突き進んでいるようなものだけどさ、こういうのは悪くない。

なるべくそれまでの過程は良い方向へと進めてはいきたいものだけだね。

落とし穴を設置したりというのは金輪際勘弁願いたいし、多少強引だったり荒い手段はこれから少しずつ僕から調整していきたいものだ。

少なくともアンナの出番はなるべく減らしていきたいが、どうなるやら僕にももはや検討もつかない。

ただ彪光が新蔵にしてくれた事を思い返すと笑顔が浮き出てしまう。

そんな笑顔を彪光に向ける僕。

それからもう一度拳が飛んできたのは言うまでも無い話。

漆（後書き）

これにて第二章は終了です。

次回から第三章に入りますが暫く執筆と見直しが繰り返されるので時間が空きます。早くて数日、遅くて数週間、一ヶ月の期間なのでなるべく早く更新できればいいのですが……。

自分で書いたプロットにそって書くのも中々やはり難しいですね、私だけですかねすみません。次回からは大切な中盤、そのためにやはり執筆と見直しは入念に行わねばと思う反面、書くのが遅いのが複雑なところ。なんとか頑張ります。

壱

今週から新蔵は数日ほど学校を休むそうだ。

妹の今日子ちゃんがこれから来る大手術までは彼女の傍にずっと
ついているためらしい。

今日子ちゃんも頼もしい兄が近くにいれば手術の不安も和らぐは
ずだ。

今頃二人は病室で楽しそうに会話でもしてるんじゃないかなと思
いながら僕は窓の外へ視線を向けて微笑。

「何が良い事でもあったの？」

「ふふ、ちよつとね」

柳生さんには言ってもいいかもしれないが、どういう経緯でと聞
かれたらなんて説明したらいいか、ちよつと悩むところ。

「ふん、変なの」

僕の微笑につられたのか、彼女も微笑。

さてそろそろ行くか。

アンナは既に席を立って何処かへ行ってしまったが、そのうちお
菓子やら色々と持ってきて隠し部屋へ来る気がする。

柳生さんは駆け足で教室から出て行き、時計を気にしている事か
らバイトでもしているのか、それとも誰かと会う約束でもしている
のか。

髪型も少し整えていたから、バイトをしているとしたら接客業か
な。

爪は伸ばしてなかったからレジ打ちをする事が多いのかも、コン

ビニとかそういう系と予想してみるが予想してどうこうだとか特に意味は無いので頭の中の想像は全て雲散。

廊下を出て隠し部屋を目指そうとすると、

「ちょっとよろしいかしら？」

目の前には一人の少女が阻むように現れた。

顔を見てみると御厨夏江、あの御厨夏江だ。

「え？ あ、ああ……。え……。？」

どうして彼女がここに？

もしかして僕が落とし穴を設置したのが知られてしまったのかも。そうだとしたらサークルの事もあるかなりますい。

「そう固くならなくてもいいわ。会わせたい人がいるの」

深呼吸を促してくるが素直には出来ない。

心臓の鼓動は恐ろしく跳ね上がっていて深呼吸どころか呼吸困難でも起こしそうなくらいに緊張している。

彼女は踵を返して歩き始め、僕は恐る恐る彼女の後ろを沿うようについていった。

生徒達の誰もが通り過ぎる彼女を目で追って、僕なんかは眼中にないようで何より。目立ちたくは無いので助かる。

平気そうに歩く御厨さんは顔面ダイブとか呼ばれたりして大丈夫なのかと心配したが快活な足取りはそういうちょっとしたあだ名をつけられたくらいじゃあへこたれないように感じられる。

それからは校舎の奥へと只管突き進み、表札も何も無い一室へと案内された。

彼女は僕へその一室の扉を開けるのを譲り、横に立つ。

ここに……。入って事か。

中に入ったら拷問道具が用意されていて御厨さんの拷問教室とかで僕は恐ろしい目に遭うんじゃないかな。

「ノックしてから入りなさい」

しかし選択肢は二つではなく一つ。

この部屋に入る事。

御厨さんに言われるがままに僕は扉を軽く叩くと、中からはどうぞと声が聞こえてくる。

女性の声だ、まあそれはいいとして僕に用がある女性というのは彪光とかアンナとか音々子さんあたりしかないと思うのでその三人と声を照らし合わせても今の声は違う。

しかし扉を開ければ早い話なので余計な長考は省いて僕は扉を開いた。

もうどうにでもなれ、そんな気持ちで。

中へ入ると御厨さんによって扉は閉められて薄暗い室内に取り残された僕はあたりを見回した。

どうにも本棚に囲まれた部屋でそれ以外は中央に木製の高そうな机が一つ。

大きな椅子が後ろ向きになっていてそれが反転されると女性が一人座っていた。

鋭い眼光と目が合うや、僕は喉唾を飲んで一步後退。

「はじめまして、さあこっちに來て」

彼女は机に置かれていたりモコンを手にとって、遊ぶように回して転がして、空いた手の指でボタンを押すとカーテンがゆっくりと開かれていった。

良い機能を備えてるね、僕の部屋にも欲しい。

陽光が差し込むと彼女の表情もはつきりと見えるが、誰かに似ているような気がする。

それに懐へ手を入れて、どこかで見た事のある扇子を取り出していた。

「総生徒会長の小鳥遊虎子よ、どうぞよろしく」

——総生徒会長は既に決められているが公表されていない、そんな話を聞いたが何処で聞いたかは記憶の波に削られてしまったように定かではない。

確かなのは、目の前にいる人は総生徒会長で本当かと疑うまでも無い雰囲気の後押ししてくれている事。

「でも言いふらさないでね。発表はまだ先だから」

扇子を開くその仕草、彼女とダブる。

彼女――彪光は今頃何をしてるんだろう、とか思いつつ僕は小鳥遊という苗字を持つ女性と彪光と似た仕草から、

「あの……彪光のお姉……さん、ですか？」

と予想してみる。

「ええ、そうよ」

彼女は扇子を閉じて答えた。

彪光、その名前を聞いて眉がぴくりと動いたのを確認。

それはどんな感情が含まれていたのかは解らないが。

机の上には膨大な資料と思われる紙が重なって塔になっていた。

ぐらりぐらりと、その中の一つの塔は彼女が扇子を閉じた時に少し触れたのか、何枚か落ちて僕の足元に。

「あらら、取ってくれる？」

僕はそれを取って彼女に手渡した。

少しだけその紙に書かれていた内容が目に入り、こっくりさんという単語があったのが気になる。

「最近、広まってるのよ。こっくりさんっていう人がいるっていう噂。貴方は知ってる？」

「ゆ、友人に最近聞きました」

「二年に生徒会長有力候補がいたんだけど、その子……今朝号泣しながら辞退するって言い出してね。こっくりさんとか何とか呟いたの。それで気になって調べてたってわけ」

「はあ……なるほど」

「ま、単なる噂なのかもしれないけどこの手の噂が広まるのも学園として好ましくないわ。わかるでしょう？ この学園の人数を考えるとね」

確かに、そりゃそうだ。

「確かめるにも中々うまくいなくてね……ま、こんな話は置いときましょう」

話を切り替える、そういう風に彼女は足を組む。

「あの子とは仲が良いらしいわね。放課後、よく二人が一緒に歩いてるのを見たって人がいたわ」

「まあそれなりに……」

別に街中へ一緒に遊びに行ったりとか休み時間は世間話の一つでもするなどは無いが、サークルを通してならば仲はいいかな。

彼女の言う、放課後一緒に歩いてたというのが二人での主な行動でそれ以外は僕の家でちよつと話したくらい。

だからそれなりに、と言っておいた。

「それは、いいとして……ね」

虎子さんは顎に扇子を当てて席を立つ。

僕へ歩み寄り、ゆつくりとした歩調で僕の周りを回り始める。

「君、生徒会に興味は無い？」

それは唐突過ぎる話。

いきなりすぎるし生まれてこの方学校生活で生徒会なんて疎遠にもほどがあった。

今じゃあ生徒会は敵、そんな生徒会にたとえ興味なんてあったとしても関係を持つのは今ではあまりよろしくない。

「い、いえ……別に興味なんて」

「そう、でもよかったら生徒会に入ってみないかしら？」

先ほどの話の切り出し方からは予想していたが、あえてここは驚いた表情をして口籠ってみる。

その間にて脳内ではこの場を乗り切る適切な方法を探していた。

適切な方法というか、上手な断り方と表現したほうが正しいかな。

「ぼ、僕は一人暮らしなので生徒会の仕事で帰りが遅くなると色々都合が悪いというか、なんというか……」

「そういうのならば私が善処するわ。もちろん、行政のように善処すると言って何もしないのとは違う、確かな意味を込められた善処よ」

早速一つ目の言い訳にて僕は行き止まりに誘い込まれた。

どうすれば行き止まりから脱出できる？ 誰か教えて欲しい。

「今までこういう事は未経験なのであまり気が乗らないのもあります……」

「私が手取り足取り教えてあげるから」

足を止めたのは丁度僕の正面へ来た時。

顔を近づけてくるが、すごく近い。

吐息が肌を擦るくらいに近くて僕の心臓の鼓動は激しく脈動した。視線も顔も下へと向けてしまう僕に、虎子さんは僕の顎へ扇子を当てて視線を強引に合わせる。

彼女の瞳は見ているだけで吸い寄せられるような黒。

「それでも、駄目？」

思わず頷きたくなるその魅力、もはや魔力とも言える容姿、雰囲気、甘い吐息に声。

この時、僕の頭の中を過ぎったのは彪光だった。

一歩後退。

それは体で示した拒否。

「……残念ね」

溜息について僕に悲しみを表した表情をしてくるがそれがまた綺麗で可愛くて、一歩前進したくなる。

「すみません……僕には荷が重いですし」

「いいのよ。気にしないで」

「一つ、聞いていいですか？」

ちよつと気になった事がある。

「どうぞ」

「どうして僕を生徒会に誘おうと？」

虎子さんは扇子を再び開いて口元を隠した。

目は笑っているが、果たしてその口元はどうだろう。

「君に興味が沸いたからよ、それ以外に言葉は必要？ ううん、必要じゃないわ。私がそう思うのだから、必要じゃないわよね？」

例えばの話。

十六になったら家督を継げと言われた彪光、それで家族関係が悪化したと言っていたが……もしかしたら虎子さんと彪光は仲が悪くて、彪光から僕を引き剥がして意地悪したかったんじゃないかなっていう、例えばの話。

とてもそうは見えないから、こんな例えばの話は雲散しておく。

「あの子とは仲良くやっていけそう？」

「ええ、まあ……」

実際、仲良くやっていけるかというよりも彼女を悪い方向から良い方向へ修正できるかが僕には重要である。

もちろん、仲良くやっていきたいが方向修正だけは怠らないようにしたい。

しかしながら彪光の言う家族関係の悪化は姉とでは無いのかな。優しい姉、そんな印象だけが強まっていく。

「昔から乱暴なところはあつてね、手が焼ける子だけど最近は学校に行くのが楽しそうなの。仲良くしてあげてね」

話はそれで終わりだった。

歩きながら考えるのは、僕を本当に生徒会へ入れたかったのか、という事だった。

どうにも僕には別の意図があつたと感じる。

それも先ほど雲散してしまった例えばの話、とかね。

もしくは様子見とか、彼女にとって重要なのは僕との接触か？

いや……これ以上、あれこれ考えるのはよそう。

考えるたびに心の中では穴が開いたかのように嫌な予感ってやつが流れ込んでくるからね。

式

総生徒会長の虎子さんと話を終えてからはそのまま僕は隠し部屋へ直接足を運んだ。

どうせ下駄箱で靴を履き替えていればきっと彪光から連絡が来るしね。

隠し部屋には音々子さんがパソコンのモニタを凝視してにやけており、僕が来ると何事も無かったかのようにモニタを消してごまかしの咳を一つ。

「あれ？ 音々子さん一人ですか？」

「ええ、まだ誰も来てないの」

お茶を出されたので僕はそれをすすりながら暫く待つ。

連絡は無い、とりあえず待機するが狭い部屋に男女二人。

ちよつとした緊張を僕は感じてそわそわしつつ、対面で僕と同じくお茶をすする音々子さんもどこかそわそわしていた。

沈黙が身を締め付けるので話題を投入すべく脳内を探し回ると先ほど会った虎子さんが浮かび上がった。

「音々子さん、小鳥遊虎子って知ってます？」

「え？ あ、ええ！ 知ってるわよ。彪光様のお姉様でしょう？」

「どんな人かは解ります？」

音々子さんは上級生だし、何か僕よりも情報を持っているかも。

すると音々子さんは眉毛を曲げて少しばかり思考。

「……優等生ってどこかしら。去年は生徒会で活躍してたし比の打ち所の無い人ね。ミス平輪にも選ばれたのよ？」

「ミス平輪？」

「十月の文化祭で毎年行われるの。二年連続ミス平輪なのよあの人がそりゃあすごい。」

まあ確かにあの人の容姿ならミス平輪はむしろ与えなければなら

ないくらいだ。

艶やかな長い黒髪、ふつくらとした潤んだ唇、ぱっちり二重瞼に滑らかな肌、その整った顔立ちが完璧を組み合わせで出来た完璧。

彪光も然り、小鳥遊の家系は皆が美人なのではないかと思ってしまう。

「完璧、そういう表現があの人にはお似合いかしら」

納得である。

肯定してそうですよねえと自然と頷いてしまっていた。

「ただ……」

ただ？

「彪光様からはあの人の話は一度もされた事が無いし、虎子さんと彪光様が一緒にいるのも一緒に帰るのも、一度も見た事が無いのが気になる……かな」

仲が悪いのかも、そんな直接言葉では言えない疑問を僕に語りかけていたように感じる。

「仲、悪いんですね」

けれども僕は即座にその疑問を言葉にした。

「そ、そうなのかしら……？」

「どうなのでしょうね？」

誰かに仲が悪いのかもという疑問を共有してほしかったのかもしれない。

彪光とアンナは隠し部屋へ結局来なかったので日が暮れ始めた頃に僕は帰宅。

音々子さんはまだしばらく隠し部屋にいるようだけど何をしているのかは聞かないでおこう。

多分、ろくな事じゃないし。

彪光の電話番号は一応、携帯電話に登録はされている。

今日、何故来なかったのかを聞いてみようかななんて暫く携帯電話の画面を眺めるが、来ないなら来ないで電話してくるはずだし、電話をする余裕すらないくらいの用事があるという事か。

それならばこちらから電話をするのは彪光には都合が悪い場面では電話がなるかもしれないので、僕は何もせずに携帯電話をポケットに入れた。

帰り道は一人で歩くと長く感じる。

慣れていたはずなのに、久しくそう感じて僕は隣に誰かいて欲しい衝動に駆られた。

誰かっというのは彪光であって、彼女と話をするのはどこか楽しさを覚えるからだ。

「うわっ——！」

その時、脇道から手が伸びて僕は腕を引っ張られた——っというより引きずり込まれた。

あまりの勢いに僕は薄暗い脇道へ倒れこみ、一体誰だよと見上げると少女が一人。

日が暮れ始めていたのと薄暗さが合成されて顔がよく見えない。それでも少女だと判断したのは髪の長さとか微かに見えたつづらな瞳。

多分って付け加えるのが妥当なところだけど、今度はその多分を雲散すべく体軀を見ると細い四肢が少女らしい体軀と教えてくれるため僕は自分の判断に自信を持った。

その自信、持ったところで何だという話にはなるが。

「とりあえず……」

とりあえず？

「一ヶ月くらい入院しろ」

彼女は両手の骨を鳴らして僕へと歩み寄る。

どうするつもりなのか——考えるまでも無く殴打。

彼女の後ろにはいつもの帰り道が見えるが人影はまったく無し。

この時間帯、今日に限って僕の帰路はほとんど人がいなかったな……。

誰かが駆けつけたとしても、威圧感を纏う彼女を前にしたらきつとただの被害者と成り代わるであろう。

暗い脇道に入った途端、彼女の不意打ち攻撃が待っているのは一目瞭然。

「ちょ、ちよつと待って！」

何とか立ち上がった僕の後退。

逃げ道は無いかと後方を見るとフェンスで塞がれているのは気のせいだろうか。

初動は僕の頬へ拳が放たれ、骨が軋む音と肉がつぶれる音が混ざり合ったような効果音が僕の鼓膜に届くと視界は一瞬で真っ白。

気がついたときには壁に寄りかかっていた。

女性とは思えない拳の威力。

この危機、どうやって凌げばいいのか誰か教えて欲しい。

更に僕は腹部を殴られ、倒れこむ前に顎を殴られ、倒れこんだ時にはわき腹を蹴られた。

「お前が悪い、ああそつだ。お前が悪いんだ。あの人を不機嫌にさせたお前がね」

何度もわき腹を蹴ってくるので僕は両腕で防御。

それでも固い靴が容赦なく両腕を軋ませる。

「あの……人？」

「あの人と話が出来て同じ空気を吸えて近づけただけでも素晴らしい事なのに、お前は最低だ」

彼女の怒りの源はあの人、らしいが誰かを特定するに先ず虎子さんが思い当たる。

「あの人からはお前については私が全て任された、だから私はお前を痛めつける。いいだろう？ いいはずだ、いいに決まってる！」

よくないけど、反論できるほどの余裕も無い。

反論を考えるよりも僕は咄嗟に彼女の足を掴んで転ばせた。

「痛っ……お前……！」

すぐに立ち上がったここから逃げるが一番の策。

だが腕を掴まれて壁に叩きつけられた。

女性とは思えない腕力、振り払おうにも今この時点で解る事は僕

の腕力よりも彼女の腕力が勝っており、総合的な身体能力全てにおいて確実に僕が負けている。

そりゃあ喧嘩なんてした事は幼少期に、それもちょっとした殴り合いではなく叩き合いくらいだけど、少女にすら劣るとなると男としてのプライドが凹む。

今は顔も凹まれそうではあるが。

そのまま僕の求める出口とは逆の方へと引つ張られて彼女は回りこんで先ほどと同じ状況が再び出来上がる。

首の骨を鳴らして先ほどよりもやる気が上昇したようで冷や汗が頬を撫でた。

僕の思い切った行動は神経を逆撫でただけで状況の悪化が嫌な予感しか知らせてくれない。

空を切る音——この狭い脇道にも関わらず回し蹴りは綺麗な軌道を描き、僕は辛うじてそれを避けるも掠っただけで頬に切り傷が走る。

そこからの。

右拳。

回し蹴りを避けたおかげで定まらなかった視線をようやく正面へと合わせたところにそれがあつた。

綺麗にその拳は僕の顔面をとらえ、後ろのフェンスに叩きつけられた後に両膝をついた。

また攻撃がくるかと思いきや、

「顔はまだ綺麗だ」

僕の顔を鷲掴みして耳や鼻、唇などを乱暴に触れていく。

次は何処を殴ろうかと品定めするかのように。

「ここも」

僕の頬へ一発、

「ここも」

僕の顎へ一発、

「ここも」

僕の鼻へ一発。

この雰囲気はもう彼女が気の済むまで殴られ続けなきゃいけないようだが、まだまだ殴られ続けそうな気がする。

気がするんじゃない、確実にそうなるであろう。

反撃しようにも相手が少女となると反撃しづらいし何よりもきつと僕は反撃しても迎撃されて更なる痛い目に遭うのは目に見えている。

だからといってこうして殴られ続けるのも嫌だが、逃げようにも膝を足で押さえつけられて立ち上がれなかった。

「おい、そこで何をしている！」

すると脇道へ何者かが僕らに気づいてやってきてくれた。

やっと誰か気づいてくれた、そんな安堵で僕は胸がいっぱい。

少女は舌打ちをして最後に僕の頬を思い切り殴ってフェンスを軽々と乗り越えて逃げていった。

全身が痛い、なんつう一日だよ今日は。

近づいてきた男性に肩を貸してもらってよろめきながらも僕は立ち上がった。

顎も殴られたからか足元が覚束無い。

「何だ君か」

男性にそう言われて僕は男性の顔を見ると、サングラスの強面に思わず目を逸らしたくなった。

でもこの人は僕を知っているのだから僕もどこかでこの人とは会ったはず。

「あの……？」

一先ず脇道から出て、先ずはお礼の一言と頭を下げた。

口の中も少し切ったかも。

喋るとちよつと痛い。

「彪光お嬢様の護衛を務めている戸上だ」

「あ、ああ……あの時の」

あの時というのは彪光と初めて一緒に帰った時、ベンツの傍に立っていた護衛の人を見かけたがそれがこの人のようだ。

「ここらは警戒して見回ってたんでな」

近くには高級車が停まっており、何人が戸上さんと同じ服装をしたごつい人達が辺りを歩き回っていた。

何だかいつもは戸上さん一人なのに、今日は護衛が嚴重だ。

よく映画などである耳につけて連絡を取り合う、小型無線のインカムでそれぞれ連絡を取り合っている様子も見られ、まるで世界的な大物を護衛しているかのようだ。

「君は女性に恨まれる性質なのか？」

「い、いえ……そんなんじゃないです」

先ほどまで少女に殴られてぼろぼろの顔で言うには説得力に欠けるが、ならば何だったというのだと更に追求されれば僕にもよく解らないと答えるしかない。

あの少女の言葉からは虎子さんがちらついていた気がするが、まさかなあ……。

「それにしてもこの警戒は……？」

「継承式へ出席するお偉いさんへの挨拶回りだ。ほら、そのな」指を指された先にはこの街を支える大企業の高層ビルが一棟。

主に電化製品で名が知られている、六角グループだ。

そこへ挨拶とは、もはや住む世界が違いすぎて僕はビルを見上げて苦笑い。

戸上さんはふと無線で連絡を取り合うと、

「車の中で少し休んでいい、お嬢様が来たら君を家まで送ろう」

「い、いえ、悪いですよ……」

ズボンなんか土がついてるし身なりも褒められたものじゃない。そんな僕が高級車へ乗り込むなんて、この人達にも高級車にも悪い気がする。

「君がいればお嬢様は喜ぶ。いてくれるとありがたいんだよ、挨拶回りで今日はかなり不機嫌だったからな」

半ば強引に僕を高級車へと押し込んで扉を閉めて、戸上さんは運転席へ。

さすが高級車、座り心地が良い。

沈むようにふんわりと受け止めてくれるこの心地よさ、椅子だけでも取り外して自室におきたいくらいだ。

それに車内は妙に広く感じる。

ただ流石に窓にはフィルムが施されて外からは見えないうようにされているし、窓や扉自体は分厚い。

どんな脅威に対しても安全だと証明してくれるような安心感を得られるね。

「失礼」

唐突に扉を開けてきたのはスーツ姿の女性。

手には何やら箱を持っていて僕の前でそれを開くとガーゼや絆創膏、消毒液などを取り出した。

「ただの治療だ、気にするな」

気にしますよ、この迅速で最高の対応は。

「沁みるから我慢してね」

サングラスをかけていてもその女性の柔らかな微笑みは僕を素直に頷かせる。

丁寧に怪我した場所一つ一つ、唾つけりやあ治るような傷でも治療を施してくれた。

治療を終えると扉を閉めてすぐさま何処かへ。

「常にどのような危機にも迅速対応、それが俺達護衛の仕事なんだな」

納得。

それから数分後、ビルの入り口から護衛に囲まれた彪光が現れる。戸上さんは彼女の前まで車を移動させ、周囲の護衛と連絡を取り合ってからようやくして扉を開ける。

あまりにも嚴重、しかしこの人達にとってはきつと当然の事なのだろう。

「や、やあ……」

「……何してるの？」

扉が開かれるとお互いに目が合った。

僕は彼女の不機嫌そうな表情に、なんとか柔らかい笑みで返す。

彪光は溜息をつき、僕の隣へと座り込むが、眉間のしわが先ほどよりも増して扇子を開く彼女の仕草は随分と乱暴。

「ちょっとトラブルに巻き込まれてたところを戸上さんに助けてもらったんだ」

「酷い顔はそういう事ね……トラブルって何があったの？」

「……まったく知らない女の子に殴られた」

あまり言いたくは無かったトラブルの内容。

「まさか、姉さん……？」

「い、いやいや！ 君のお姉さんじゃないよ！」

お姉さんがそう仕向けた気もするけど、直接ではないので僕の言葉は一応正しい。

でも彼女の口から虎子さんの事が出てくるとなると、虎子さんが僕を襲うという可能性が彪光の思考の一つにあったという証明にもなる。

「そう、ならよかった。でもどうして襲われたの？」

「どうしてだろう？ 僕も解らない」

彪光は眉間にしわを寄せてしばらく考えていた。

「姉さん……。いえ……。考えすぎかしら、でも……」

今日は虎子さんに呼び出されて会ったって言えばきっと彪光の長考は解決する。

多分、答えは思考の中に漂っていて、それでも彪光はそうじゃないとあえて目を逸らしてる。

「きっと僕を誰かと勘違いしてたんだよ、気にしないでいいさ」

「そう……。まあいいわ。戸上、彼を家まで送って頂戴。ほら、住所言いなさい」

僕は戸上さんに住所を教えると彼はカーナビに何やら入力。画面には僕のアパートへの進路が表示され、僕はその機能に関心。

現代技術ってすごいね。

車両は走り出し、彪光は疲労を放出するような溜息をついた。

「それにしても大変そうだね」

「大変よ。気分転換に貴方の五臓六腑をぶちまけたいわ」

そんな気分転換で僕の五臓六腑をぶちまけられたら流石に困る。

「お腹空いた……。そうだ、どこか御飯食べにいきましよう？ 断らないわよね？ 断ったらぶちまけるわよ？」

何をぶちまけるのかは聞かないでおく。

「日本料理とフランス料理、どっちがいい？ お金の心配ならしなくていいわ」

中々悩ませる質問だ。

日本人として、おそらくこれから食すであろう和の心あり、なんという高級の日本料理を選ぶべきか、それともお洒落な料理でテレビなどがよく取り上げているフランス料理を選ぶべきか。

どっちも食いたい、本音はこれ。

だがしかし、今はどちらかを選ばなければならない。

悲しいけれどこれが現実、二兎追うものは一兎も得ず。

「じゃあ……フランス料理で！」

日本料理とフランス料理を乗せた天秤はフランス料理へと傾いた。だってナイフとフォークを使って食べるのをやってみたかったんだもん。あのお洒落な感じ、解って欲しいなあ。

すると車両は彼女の言う「フランス料理だから、いつもの場所へ」と方向を変更。

人生、一度は食してみたかった料理でもある。

彼女は携帯電話を取り出して何やら「今日は二人分……」云々の連絡をしているようで、もしかしたら僕は今、一般人がとても羨ましい事を体験している最中なのでは無いかと自分に問いかける。

ああ、そうだ。

高級車に乗ってこれからフランス料理、なんかすごいぞこれ！
なんて思わずにやけてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175w/>

僕らの未来に正義は無い

2011年12月21日22時45分発行